

群馬県における研究の動向

1 旧石器時代

麻生 敏隆

はじめに

当事業団創立十周年記念論集『群馬の考古学』では、1988年度までの動向を取り上げていた。そこで今回は、1988年以後の動向について記述することとする。

(1) 捏造事件関係

2000年11月の全国紙のスクープという形で明らかになった「旧石器捏造」事件がまず筆頭にあげられる。これは東北地方を中心に北は北海道から南は東京までの東日本一帯で、本物の石器を埋め込んで旧石器時代の遺跡を捏造したもので、その数は50ヶ所以上と言われており、その当事者が前期旧石器の年代を次々に遡らせてきた、「ゴッドハンド（神の手）」とも呼ばれる在野の研究者であったために、センセーショナルな話題として取り上げられた。彼は群馬県内でも1988年の勢多郡新里村の入ノ沢遺跡、1997年の北群馬郡子持村の加生西遺跡と吾妻郡高山村の中山峠遺跡、そしてまさに発覚した時点で発掘調査が進められていた沼田市の下川田入沢遺跡の4ヶ所の発見と、1996年の大間々町の桐原遺跡の発掘調査の協力をに行っており、計5ヶ所に関係していたのである。こうした遺跡の大半は、次々に塗り替えられる年代や遺構の規模と内容が報道され続ける中で、充分な検討がなされたとは言えない状態であった。それらの大半が捏造と発覚した後、各遺跡の調査責任者らにより正式な報告がなされたが、そこに至るまでに検証作業が幾度となされた。だが、旧石器研究に対する不信感や、考古学界全体が受けたダメージの建て直しにはやや時間がかかると考えられている。特に、前期から中期にかけての旧石器については半世紀前に戻ったとも言われており、以前から古いと考えられていた武藏野台地の東京都中山谷遺跡や西之台遺跡・武藏台遺跡、長野県の石子原遺跡、長崎県の福井洞穴遺跡15層などの石器群が再び俎上に上がってきた。さらに最近では岩手県の金取遺跡、長野県の佐竹中原遺跡、長崎県の入口遺跡、熊本県の沈目遺跡や下横田遺跡、宮崎県の後牟田遺跡などが注目されてきている。県内でも伊勢崎市の権現山遺跡や不二山などの再検討をも促す結果となっている。だが、いずれも不明確な出土状態や石器群の貧弱さなどがネックでもある。特に、権現山は既に宅地開発により消滅していることから検討が難しく、不二山遺跡も近年の新里村教育委員会の発掘調

査により、不二山本体が大規模な土砂災害により隆起した地膨れであることが判明していることから、実際には当初の想定ほど古くない可能性もある。

(2) 岩宿50周年

本来ならば筆頭にあげるべき事例として、相沢忠洋による岩宿遺跡発見50周年にあたる1999年に開催された様々な行事があげられる。まず、日本考古学協会の秋の地方大会が群馬県内での開催となり、初日の総会と記念講演の会場に岩宿遺跡が所在する笠懸町の文化ホールが、2日目の研究発表に前橋市の群馬大学があてられた。その岩宿遺跡に隣接した鹿の川沼の畔に日本の岩宿（旧石器）時代の情報発信の場として、1992年に町立の笠懸野岩宿文化資料館が開館し、初代館長に戸沢充則明治大学教授が、二代目館長には松沢亜生が就任した。子供からお年寄りまでが楽しく学べる開かれた施設を目指して、考古学をはじめとした関連分野の研究者らによる公開講座「岩宿大学」など様々な企画が展開されている。研究者への奨励を含めた岩宿文化賞の制定、岩宿フォーラムと題したシンポジウムが、環状ブロック群や石材、石器群変遷などのテーマで議論されている。さらに、岩宿遺跡や石器の説明と、石器群の変遷、下触牛伏遺跡に代表される「ムラ」の解明と、武井遺跡に代表される遺跡群の形成などを盛り込んだ1992年の常設展示解説書や、県内の石器群の変遷を概説した1993年の「群馬の岩宿時代」、岩宿遺跡発見50周年に関連する『岩宿時代を遡る一前・中期旧石器時代の探求一』、『日本史を書き換えた岩宿の発見』、それに『岩宿遺跡発掘50年の足跡』の3つの記念企画展示や、岩宿フォーラムでの『岩宿発掘50年の成果と今後の展望』、2001年の国民文化祭での記念シンポジウムなどが盛大に行われた。県外ながら、発掘調査を行った明治大学でも考古学博物館において『岩宿発掘五十年 旧石器時代研究の原点と足跡』が開催された。

(3) 発掘調査

依然として大規模開発が目白押しであり、それに関連して数多くの遺跡から旧石器時代に関しても様々な注目すべき成果があがっている。

まず、高崎から軽井沢に向けて榛名山南西麓を横切る北陸新幹線の建設に伴い、群馬郡箕郷町和田山天神前遺跡や同町白川笠松遺跡、群馬郡榛名町白岩民部遺跡、同町三ッ子沢中遺跡でAT下位の「環状ブロック群」が相次いで発掘調査された。北関東自動車道での伊勢崎市波志江西宿遺跡・伊勢山遺跡や同市波志江中宿遺跡、同市

岡屋敷遺跡、同市舞台遺跡、同市書上遺跡、伊勢崎インターに隣接する三和工業団地I遺跡からは、前記したAT下位の「環状ブロック群」を中心に、槍先形尖頭器、細石器を中心とするいくつもの時期の石器群が出土している。前橋市と赤堀町の境に位置する多田山丘陵の南側半分が北関東自動車道の土盛り部分の用土として掘削される関係で、今井見切塚遺跡と今井三騎堂遺跡の2遺跡が調査され、AT下位から旧石器時代終末期にかけての3～4時期の石器群が出土している。上武国道では、前橋市今井大日堂遺跡や萱野遺跡・上泉遺跡・亀泉坂上遺跡・荻窪南田遺跡などから、AT下位の石器群や槍先形尖頭器などの2～3時期の石器群が出土している。赤城山南麓の勢多郡富士見村の小原目遺跡や小暮東新山遺跡、宮城村の市之関前田遺跡や柏倉芳見沢遺跡、新里村の新宮I遺跡や広間地西遺跡・十二社遺跡・山上城跡IX遺跡、梨ノ木D遺跡・梨ノ木J遺跡、大胡町の堀越甲真木B地点遺跡や日光道東遺跡、前橋市の内堀遺跡や熊の穴遺跡・鳥取福蔵寺II遺跡、北橘村の北町遺跡や箱田遺跡群上原遺跡でも、AT下位の石器群や槍先形尖頭器、細石器などのいくつかの石器群が出土している。さらに、鯉沢バイパス建設に関連して北群馬郡子持村の白井遺跡群の白井北中道遺跡では、縄文時代草創期の隆起線文土器と有舌尖頭器や片刃打製石斧などの石器群が出土している。東毛地域では、八王子丘陵の周辺の北関東自動車道の太田市八ヶ入遺跡や東長岡戸井口遺跡で槍先形尖頭器や細石器のいくつもの石器群が出土している。西毛地域では、藤岡丘陵での藤岡市北山B遺跡や、上信越自動車道建設に伴う甘楽郡甘楽町の白倉下原や天引向原遺跡・天引狐崎遺跡・多比良追部野遺跡、吉井町の多湖蛇黒遺跡や折茂III遺跡などでAT下位の「環状ブロック群」が相次いで発掘調査された。

(4) 編年

数多くの発掘調査事例の増加を受けて、県内の変遷を組み立てる作業も行われつつある。まず、1989年に麻生敏隆と大工原豊は、北関東における尖頭器文化について論じ、県内の変遷を提示した。その後、1993年の岩宿フォーラムでは群馬編年をI期からIV期までとし、AT下位をI期（麻生・大工原）、II期（小菅将夫）、槍先形尖頭器をIII期（中島誠・軽部達也）、細石器をIV期（桜井美枝）とした。小菅はさらに、I期を分けてI期とII期、そして、II期をIII期、III期をIV期、IV期をV期と再編成している。それぞれの詳細については石器組成などが関係するものの、いずれにしても編年の骨組みは固まりつつあり、全国との比較も比較的容易になりつつある。関矢晃もテフラを利用して段階設定している。

(5) 遺構

群馬ではAT降灰以前の遺跡が多いことが特徴である。これは局部磨製石斧とナイフ形石器を石器組成とする岩宿遺跡のお膝元である群馬県ならではの事象もあり、約20～50mの規模で中央部に空白地帯を持ちリング状に石器が分布する特異な遺物出土状況を示す「環状ブロック群」が検出されるのも特徴である。1993年の第1回岩宿フォーラムでは、全国規模での遺跡集成がなされその時点で実に県内の10遺跡11地点を含めた40ヶ所の遺跡がリストアップされ、その形成要因についても様々な説が提示された。岩崎泰一は自らが調査及び整理担当した下触牛伏遺跡の事例を中心に、遺跡構造について論じている。井上慎也も発掘調査事例が増加した鏑川流域でのAT降灰以前の石器群の遺跡の分析をしている。津島秀章もまた、自らが調査及び整理担当した三和工業団地I遺跡での器種組成や石器分布、接合関係などの分析を通じて「環状ブロック群」の構造解析を行い、遺跡内での様相を論じている。また、黒曜石と黒色安山岩の産地同定の成果を利用して、遺跡内での分布域間での関係を推測している。小菅はその後も増え続ける資料の集成を行っており、2000年で63遺跡、2003年で70を超える遺跡数となっており、県内では20遺跡21地点である。また、槍先形尖頭器の遺跡で全国屈指の規模を誇る武井遺跡は2002年に史跡公園として整備されたが、遺跡の形成に関しても様々な議論があり、数十万点にも及ぶ膨大な遺物を分析の成果の一部の発表が、1998年の第6回と2000年の第8回の岩宿フォーラムを通じて行われており、今後も継続される予定である。注目すべき遺構としては、槍先形尖頭器の時期である小暮東新山遺跡の竪穴住居が注目されているが、一方で住居跡かどうか疑問視する意見もある。

(6) 遺物

槍先形尖頭器については、関口博幸らが技術形態学による変遷を論じている。細石刃の遺跡では、円柱系の市之関前田遺跡や柏倉芳見沢遺跡、北方系の上原遺跡や鳥取福蔵寺II遺跡、大雄院前遺跡、八ヶ入遺跡など、関係する資料がここ数年で増加しており、北方系統の削片系の細石器を中心に研究している桜井が、細石刃文化の様相について論考している。萩谷千明もまた詳細な分析を通じて、石器群の様相とその編年の問題を論じている。石材の流通については、前記した岩宿フォーラムで2回にわたり、県内で主に多用される黒曜石・硬質頁岩・黒色頁岩・黒色安山岩の4種類の石材を中心に議論された。特に、利根川上流域などに原産地を求めることが出来る黒色安山岩や黒色頁岩などの在地系統の石材と、県内で産出しないことから遠距離の産出地から搬入される黒曜石や硬質頁岩などの石材選択とその流通を通じて、交易

を含めた集団活動の様相を解明しようとする方向性で研究が進められている。また、桜井や津島、井上昌美らにより、石材原産地そのものの詳細な様子を解明するためには、鏑川流域などの黒色安山岩と、利根川上流域での黒色頁岩の分布状況などの地道な分析を続けられている。遺物の自然科学分析では、黒曜石や黒色安山岩について従来のフィッショントラック法や水和層年代測定とは別に、非破壊による蛍光X線分析がここ数年増加している。この方法では遺物の破壊を免れることから、これまで分析事例が少なかった群馬県内でも黒曜石の分析事例が徐々に増えてきており、今後の石材流通の研究の上で主体を占めると考えられる。

参考文献は、スペースの関係で文章中で述べた主要なものだけに留め、発掘調査報告書類は除く。

註

- 麻生敏隆 1991 「群馬県における細石器文化の様相」『中ッ原第5遺跡B地点の研究』八ヶ岳旧石器研究グループ
 麻生敏隆 1992 「後田遺跡の再検討—石材と遺物分布からみた人間と物の移動—」『人間・遺跡・遺物—わが考古学論集2—』発掘者談話会
 麻生敏隆・大工原豊 1989 「北関東における尖頭器文化の様相」『長野県考古学会誌』59・60 長野県考古学会
 井上慎也 1996 「後期旧石器時代前半期における石器製作技術の様相—群馬県鏑川流域の石器群を中心として—」『法政考古学』21 法政考古学会
 井上慎也 1996 「後期旧石器時代の石材分布と石器群の検討—群馬県における石材研究—」『法政史学』47 法政大学史学会
 岩崎泰一 1992 「後期旧石器時代に於ける集落・集団研究の現状認識」『研究紀要』9 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
 岩宿フォーラム実行委員会編 第1回～第11回 1993～2003 笠懸野岩宿文化資料館・岩宿フォーラム実行委員会
 小菅将夫 2000 「環状ブロック群の構造」『考古学ジャーナル』465 ニュー・サイエンス社
 小菅将夫 2002 「周辺地域の様相—群馬県—」『茨城県における旧石器時代研究の到達点—その現状と課題—』ひたちなか市教育委員会・茨城県考古学協会
 小菅将夫 2003 「環状ブロック群研究の現状と課題」『旧石器人たちの活動をさぐる—日本と韓国の旧石器研究から—』講演会・シンポジウム予稿集 大阪市学芸員共同研究「朝鮮半島総合学術調査団」旧石器シンポジウム実行委員会
 小菅将夫 2003 「北関東地方との対比」『第15回長野県旧石器文化研究交流会 シンポジウム「野尻湖遺跡群の旧石器時代編年」一発表要旨—』長野県旧石器文化研究交流会
 桜井美枝 1991 「北方系細石刃文化の南下」『考古学ジャーナル』341 ニュー・サイエンス社
 桜井美枝 1993 「北関東の細石刃文化」『細石刃文化研究の新たなる展開』佐久考古学会・八ヶ岳旧石器研究グループ
 関矢 晃 1997 「火山灰層と旧石器出土層位—関東地方を中心として—」『大平台史窓』 史窓会
 大工原豊 1990・1991 「AT下位の石器群の遺跡構造分析に関する一試論(1)・(2)」『旧石器考古学』41・42 旧石器文化談話会
 津島秀章 1999 「遺跡構造に関する一考察—後期旧石器時代・環状ブロック群の中央域について」『研究紀要』16 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
 津島秀章 2000 「石器石材と遺跡構造—石器石材から見る環状ブロック群の構造—」『研究紀要』17 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
 萩谷千明 2003 「北関東の細石刃文化」『シンポジウム 日本の細石刃文化 I—日本列島における細石刃文化—』八ヶ岳旧石器研究グループ

2 縄文時代

藤巻幸男

1. 集落

集落論の停滞が指摘されて久しいが、全国各地で縄文時代集落遺跡の調査事例は急増しており、2001年12月に縄文時代文化研究会の第1回研究集会でも「縄文時代集落研究の現段階」が開催された¹⁾。集落を主題とする全国規模の検討会としては久々の開催である。まづ、各地の最新資料を含めた現状報告が行われ、次いで3つのテーマに沿った基調報告と総合討論が行われた。

テーマ1 環状集落論をめぐって

—環状集落論と横切りの集落論—

テーマ2 非環状集落をめぐって

テーマ3 定住論、移動論をめぐって

「環状集落論」は、集落を構成する遺構が当初から決められた空間規制に従って構築されたとするもので、その共通意識こそが集落分析のカギだと考える。これに対して「横切りの集落論」は、長期利用の結果として環状になったのであり、ワンモーメントの集落は小規模集落と変わらないとする立場をとる。討論の結果は今回も平行線で終わったが、集落の構造と形成過程を可能な限り詳細に検討する立場では一致できるであろう。

近年、谷口康宏氏は環状集落を分析した一連の論考のなかで、環状集落に認められる二つの重要な構造として「重帯構造」と「分節構造」の存在を指摘し、「重帯構造は広場を中心として各種の建物や施設を同心円上の所定の圈内に配置するもの」で、「環状集落の長期的な計画性をよく表すもの」とし、「分節構造は、環状集落の内部を区分する構造」で、「住居群や墓群を大きく二分する二大群の構造が最もはっきりしている」ことを実例をあげて示し、「環状集落の分節構造の意味や性格を端的に表しているのは、墓群の分節である。死者が埋葬される場所に厳格な区分がある。しかもそれが非常に長い間踏襲されている事実は、『分節』が血筋・系譜の区別に基づくものであることを、強く示唆している。」「世代を超えて明確に系統を受け継ぎ、祖先を祭祀する血縁集団として最も考えられるのは、一般的に氏族・系族などの名で呼ばれる単系出自集団である。」としたうえで、「環状集落の背景に単系出自集団が組織化された要因は、経済的利権を確保する必要性が第一であろう。つまり定住が出現し、人口密度が高まる状況下で、領域や資源に対する利権の問題が発生し、それを安全に継承し、あるいは集団関係を円滑に調整するための社会構造が、現実的に必要なってきたことが最も重要ではないか」と指摘している²⁾。

山本輝久氏は、それが最終的な姿であったにせよ、東

日本の前期以降の大規模集落の多くは環状構造を基本としており、なぜ環状集落が形成されるに至ったかを解明することこそ必要であるとし、谷口の論考を引用したうえで、それは単に縄文時代集落観にとどまらず、縄文時代社会をどう捉えるかの根幹に係わる問題に直結していると指摘する。

テーマ2の非環状集落については、遺構が列状に分布する集落形態を中心に討議され、地形的制約によるものではないことが確認された。この集落形態は、東北地方の円筒土器分布圏の事例がよく知られているが、群馬県も含めて全国的に認められることが確認された。

テーマ3は、大規模集落が通年で定住していると考えるか、回帰性をもった移動が行われていたとの前提に立つかについてである。末木健氏は以前「移動としての吹上パターン」のなかで、廃絶された住居床面上に認められる自然堆積の無遺物層と、その上から出土する多量の土器の存在から、無遺物層堆積の期間は他所に移動していたと考えた。これに対し、山本輝久氏は無遺物層を人為的な埋土と見る。また、櫛原功一氏は、堅穴住居は冬仕様の土葺きなので、第一次埋没土は廃絶と同時に形成される。中期初頭までは移動的であるが、前半には住居がしっかりとしてくるので定住性が高まり、中期末には敷石住居が出現して通年定住となるとの見解を示した。相原淳一氏は交易活動が盛んであることから、定住が前提と考える立場を表明した。

なお、総合討論では時間的制約から扱われなかったが、「環状貝塚・環状盛土遺構」について江原英氏は、阿部芳郎氏の研究に注目しながら、大量の遺物を用いた人々の居住場所は「高まり部分」にあるとの推定が最も整合性があると指摘し、環状盛土遺構を後期後半以降の大規模集落の一形態と考えて今後も検討を加えていく考えを表明している。

一方、県内では大工原豊氏の一連の取り組みがある³⁾。その実践例である中野谷松原遺跡では、前期後半の大規模集落の構造と変遷を跡づけ、墓域に対する遺物の集積が単なる不要物の捨て場ではなく、生活用具に対する「物送り」的な意味合いで機能していた可能性や、高年齢層への副葬品埋納の想定、中央広場を囲うマーカーポール（大形木柱）の想定、石器石材入手からみた活動領域（テリトリー）の分析、黒曜石をめぐる交易関係など、示唆に富む内容となっている。

大規模集落の調査は様々な点で多くの困難を伴うが、一方では情報の宝庫でもある。そのなかで、可能な限りの詳細なデータを客観的に積み上げ、前期後半の大規模集落の構造と性格を追求した仕事は、十分に評価されなければならない。当遺跡の報告書を紐解くと、遺跡の隅々にまで調査担当の目が配られており、選択された調査メニューを貫徹するための様々な工夫が施されていること

に気付く。膨大な情報が重畠する大規模集落では、厳選された調査項目の徹底と調査担当の適切な判断が必要であり、中野谷松原遺跡で得られた成果と視点は今後の発掘調査に生かされ、検証されなければならない。

また、最近になって石坂茂氏が中期末葉の環状集落の崩壊と環状列石の出現について論考を提出している⁴⁾。これは、縄文時代の大きな転換期にほぼ軌を一にして起こる現象に着目し、県内資料の分析からその社会的背景に迫ろうとするものである。分析のなかで石坂は、いずれも居住を前提とする拠点集落であることを確認した上で、中期の環状集落と環状列石集落が共存する事例がないこと、中期終末の環状列石集落は短期で終焉し、後期には弧状列石を伴う核家屋を中心とする集落が出現することを指摘し、その変遷から各時期の統合原理や価値観の変化を読みとろうとする。また、環状・弧状列石の構造分析から、中期末葉の環状列石には内部に配石や立石を伴うが墓は認められず、列石配置内部に施設や遺物が認められないことから、その性格を祭祀施設と想定し、後期後半の弧状列石の出現をもって墓を伴うようになることを指摘した。

2. 墓制研究

内陸に位置する群馬県では、焼骨や特殊環境以外では骨が残らないこともあって、墓制に取り組んだ事例は少ないが、縄文時代の集落や社会を考えるうえで重要な要素でもあり、県内の事例を中心に振り返っておきたい。

下城正氏は、月夜野町深沢遺跡の集落構造と配石墓の変遷について、類似点の多い榛東村下新井遺跡との比較を通して分析し、配石墓群を中心とした土坑群・方形柱穴列・敷石遺構などの墓や祭祀の場が位置し、それを溝あるいは窪地で区画された外側に居住空間が形成される集落構造を想定した⁵⁾。

その後、深沢遺跡に隣接して矢瀬遺跡が発見され、墓域と集落との関係がより具体的に検討できるようになった。矢瀬遺跡の正式報告が待たれる。

大工原氏と林氏は、安中市天神原遺跡の調査結果から、後期後半期の配石墓群の形成から晚期前半期の環状列石の構築に至るまでの詳細な経過を跡付け、特定層の集団墓である配石墓群が放棄されずに再整備され、祭祀の場へと昇華・継承されることから、居住集団の継続性と社会的体制・原理の継承を暗示しているとした。また、天神原遺跡の構造と変遷に照らして深沢・押手・下新井各遺跡を分析し、大筋では共通していることから、群馬県地域の集団が保持した精神文化の社会的連続性を指摘し、さらに関東西部から甲信越地域に見られる配石墓と東北地方北部の配石墓との関連を指摘した⁶⁾。

町田市田端遺跡の調査でも指摘されてはいたが、配石墓とその上部に形成された環状列石（配石）に不連続が

あり、時期と性格が異なることを明確にしたことは重要であり、その後の配石墓研究に与えた影響は大きい。

石坂は、中期終末の環状・弧状列石が短期で終焉した後、後期堀之内1式段階から新たに認められる弧状列石のなかには、列石に付随して配石のほかに、集団墓的な土坑墓や配石墓伴うものがあることを指摘する⁷⁾。

前期や中期の墓は上部配石を伴わないものも多いことから、墓としての認定に苦慮するが、その形態的特徴や群在する傾向などを勘案・吟味した上で、積極的に認定に取り組むべきだろう。「墓は墓として断定することにより次ぎの研究段階へ進むべき」とする斎藤忠氏の言葉に従いたい。後期配石墓では、墓を中心とする下部構造と様々な配石・施設等で構成される上部構造は必ずしも対応する関係ではなく、注意を要する。また、配石墓の内部や周囲から獸骨を中心とする焼骨が出土する例も数多く知られており、葬送儀礼との関係が考えられている。配石墓の分類、分布と系統、葬法の実態、集落との関係などについて、今後も積極的な取り組みが必要である。

3. 土器型式

発掘調査の増大は、集落を構成する各種遺構の多様性のみならず、土器資料においても格段の増加をもたらしている。各地の土器型式も一旦は安定したように見えたが、資料の増大、特にこれまで考古学資料が少なかった地域での新資料の追加により、これまでの型式概念では説明しきれない多様な姿が判明しつつある。これは、ある意味では縄文土器のもつ本来の姿が、より実態に近づいてきたことを示しており、その意味では歓迎すべきであろう。

以上のような状況のなかで、最近の土器型式研究は、土器の系統と型式あるいは土器群相互の関係に主眼を置いた検討が中心であり、広域的視点での土器群の構図的すり合わせが各地で盛んに行われている。本県でも、縄文セミナーの会が主催する年1回の検討会が続けられており、これに触発されて設定された新型式もある。

谷井彪氏は從来の型式定義と実態とのずれが生じていることを指摘し、「これらの混乱の状況に広域的視点による土器分析が加わって從来の内在的発展段階に基づく編年に対する補正手段が加わることで、理論的整合性を求めるさらなる議論を進める前提が揃いつつある。現在は固定的構図から多層多角的構図へシフトする時期がきているように思われる」とし、土器分析の視点として、

1. 縄文社会観、土器制作の基本理念
 2. 認識可能なものとしての相対的時間軸による編年
 3. 個人差、地域差、組み合わせの偶然性、統計処理の誤差を超えた差異の抽出
 4. 広域比較による連動と諸要素の整合性
- の4項目をあげたうえで、「地域とは累積した文化的営為

と情報の多層的重なり、すなわち、文化要素の多層的、相互に交差した複合体とみることができる。構成員も共同幻想の枠内に存在し、土器作りにあたってもこの枠に規定されている。」と指摘し、「土器の研究は地域そのものを関係の鎖の輪の中で浮かび上がらせることにあるだろう。」「地域に生まれ、地域で生きた縄文人の多様性と生き生きとしたダイナミズム、交通の鎖の輪の復元はこの課程を通してはじめて可能となるであろう」との見通しを示し、実践を試みている⁸⁾。

一方、鈴木徳雄氏は縄文時代後期の土器に認められる、深鉢を中心とする「類型」による系譜的関係性の表現から、多様な「器種」に基づく役割的な行為相互の関係性の表現への変換に着目し、浅鉢形土器の扱われ方から縄文時代の文化的体系の一部である行為の変化を分析することで、土器から見た社会的関係とその変化の過程に接近しようとする、新たな試みをはじめている⁹⁾。

また、山口逸弘氏は中期の土坑出土土器の選択性の分析から、異系統の土器が意図的に選択された可能性を主張し、縄文時代中期を「異系統土器群共存社会」と仮称したうえで、中期集落内に複数の型式群が存在するのは、個人と集団の関係を維持するための「緊張緩和策」であった可能性を指摘する¹⁰⁾。

いずれも、土器の分析から縄文時代の社会の実像にまで迫ろうとする意欲的な取り組みであり、今後の進展を期待したい。

4. 石器研究

縄文時代の実用石器の研究は、土器に比べて大きく後れているのが現状である。大規模集落の調査では膨大な数の石器・剝片類が出土するが、それを正面から取り組んだ報告例は少ない。しかし、集落遺跡の認定や比較をする場合、その遺跡の生業活動や集落生活、あるいは活動領域の問題や交易活動の実態を理解するうえで、利器としての石器の組成と量比の把握は避けて通れないのが現実であろう。

そのなかで、大工原氏が中野谷松原遺跡で実施した取り組みは出色と言える¹¹⁾。氏は同遺跡から出土した20,000点を超える石器を相手に、土器との共伴関係から帰属時期を抽出し、さらに型式学的方法論に基づいて石器群を体系的に分類したうえで、石器の組成(系列組成・器種組成・石材個数組成・石材重量組成)を算出して、石器群の変化の全体像を明らかにし、石材入手場所を推定して、居住集団の行動領域の推定と石材入手に係わる仕事量を算出している。まさに体系的な石器群研究を実践した好例であり、今後の発掘調査において十分に模範となるであろう。

また、氏はここでの成果をもとに、広域に流通・分布している黒曜石の焦点をあて、その交換・交易の問題に

ついてダイナミズムな自説を展開している¹²⁾。

ここでは石器の個別研究については触れないが、縄文時代遺跡の報告において、石器の器種組成・石材個数組成・石材重量組成、および剝片類の石材個数組成・石材重量組成を含めた、石器類の総量データの提示を提案したい。発掘調査報告書に掲載される遺物は調査担当が任意で選択しているのが現状であり、土器等も含めた遺跡の総量が把握できるデータは、遺跡の性格、活動領域、交易活動の実態などを検討するうえで、今後益々必要になると考える。

註

- 1) 縄文時代文化研究会 2001 「第1回研究集会発表要旨 縄文時代集落研究の現段階」「第1回研究集会基礎資料集 列島における縄文時代集落の諸様相」
- 2) 谷口康宏 1999 「環状集落から探る縄文社会の構造と進化」「最新縄文学の世界」朝日新聞社
- 3) 大工原豊他 1998 「中野谷松原遺跡」群馬県安中市教育委員会
- 4) 石坂 茂 2002 「縄文時代中期末葉の環状集落の崩壊と環状列石の出現—各時期における拠点的集落形成を視点とした地域的分析—」「研究紀要20」(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 5) 下城正他 1989 「縄文時代後期における配石墓の構造—深沢遺跡の形成過程を中心として—」「研究紀要」6 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 6) 大工原豊・林 克彦 1994 「配石墓について」「中野谷地区遺跡群」安中市教育委員会
大工原豊・林 克彦 1995 「配石墓と環状列石—群馬県天神原遺跡を中心として—」「信濃」第47巻第4号
- 7) 同 4)
- 8) 谷井 彪・細田 勝 1997 「水窪遺跡の研究—加曾利E式土器の編年と曾利式の関係から見た地域性—」「研究紀要」第13号 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 9) 谷井 彪 2001 「中部地方中期後半土器群と加曾利E式土器」「長野県考古学会誌」97 長野県考古学会
- 10) 鈴木徳雄 2000 「縄文後期浅鉢形土器の意義—器種と土器行為の変化—」「縄文時代」11 縄文時代文化研究会
- 11) 山口逸弘 1999 「土坑出土土器の選択性—中期土坑の2個体の共伴例から—」「縄文土器論集—縄文セミナー10周年記念論文集—」縄文セミナーの会
- 12) 同 3)
- 13) 大工原豊 2002 「黒曜石の流通をめぐる社会」「縄文社会論(上)」同成社

3 弥生時代

大木紳一郎

はじめに

昭和40年代後半から始まる大型開発プロジェクトによって、埋蔵文化財の発掘調査がそれまでにない大がかりな調査体制でもって進められることとなった。発掘調査数は急激な増加を続け、また広大な面積を対象とした全面調査によって、考古資料はそれまでとは比較にならないほど膨大な蓄積をみた。また県内全域に広がる調査地域の拡大は、「文化の地域性」についての検討を可能にした。ここで得られた新たな知見や研究対象の拡充は、弥生文化の具体相を解明する上でも大きく寄与したといえる。その成果については、『群馬県史 通史編1』(柿沼ほか 1990)や、北関東弥生文化を特集した『駿台史学』84号(1992)、そして土器中心の論考を掲載した『群馬の考古学一創立十周年記念論集一』(財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 1988)にまとめられている。本稿ではこれらの論考を基点として、その後の研究展開に焦点をしぼってみることにする。

(1) 土器編年の再検討

これまで広く行われてきた前期・中期・後期の三大時期区分にとらわれることなく、型式間の併行関係を重視して東日本全体を視野に入れた広域編年の再検討が進められている(石川 1996)。そこでは新たな土器型式の設定や枠組みの見直し、従来型式の時期及び地域細分などがその俎上にのぼることとなった。

群馬県では、最古の在地弥生土器として岩櫃山式が位置づけられていたが、藤岡市沖II遺跡の発掘調査によって、前期にまで遡る在地系土器群の存在が明らかにされた。在地の晩期縄文土器の流れをくみ、東海地方の条痕文系土器の影響によって成立したと考えられる土器群は「沖II式」(鈴木 1987)、「沖式」(設楽 1991)と呼ばれる。氷I式や千網式からの系統的整理や時期細分、条痕文系土器や遠賀川系土器との併行関係など、主に編年上の位置づけが当面の議論になるが、現在のところ水神平式に併行する前期新段階との評価には落ち着いていない。また、更に古い土器群も知られるが、在地型式認定の根拠となった「在地型突帯文壺」の出現が不明瞭(小出 2003)で、晩期浮線文土器から沖II式へ変遷する過渡期と位置づけられている(若狭 1996)。

土器編年研究のうち、近年で最も大きな見直しが迫られたのは中期の編年だ。岩櫃山式—須和田式—竜見町式とした従来の大まかな三期区分を、新たな型式の設定や細分によって再編成が進められることとなった。具体的には、従来の「須和田式」を「平沢式」と「出流原式」に分割し、さらに熊谷市池上遺跡出土土器によって設定

された「池上式」が新しい段階に位置づけられた。また、「野沢I」と捉えられていた(柿沼 1990)磨消し縄文系土器群のうち、県南西部の鍋川流域に分布する土器群が「神保富士塚式」として新たに設定された(鈴木 2002b、石川 2003)。これは、筒形土器と浅鉢の高い組成率、充填手法による磨消し縄文の広範な採用、異器種・異系統間での文様や属性の共有互換などを特徴とし(石川 2003)、中期前葉に位置づけられた。石川氏はさらにその後続型式として甘楽町長根安坪遺跡出土土器を掲げた。また、これまで東北地方南部の土器(南御山式の一部)と理解された筒形土器について、北関東ではすでに中期初頭から出現し、また胴部が無文であるとの特徴から、独自の型式として存在していたことを強調している。なお、この筒形土器については、文様帶に注目することで時期細分や系統差の抽出を試みる分析も始められている(鈴木 1992a、宅間 1993)。神保富士塚式の設定や筒形土器の型式学的再検討は、編年観の見直しだけでなく、群馬県の弥生土器成立過程とその意義を再認識するきっかけを与えてくれたといえる。鈴木氏が指摘するように(鈴木 1992a)、弥生中期については蓄積されていた古い発見資料を含めて、地元研究者の取り組みが消極的だったことは認めざるを得ない。その反省も込めて、県内各地の蓄積資料について再評価を行い、あらためてその位置づけを図るべき研究段階にあるといえようか。

中期後半の「竜見町式」は、長野県の百瀬式とほぼ同一の特徴をもつとの指摘(設楽 1986)をうけて以来、栗林式に含まれるべき「小様式」であるとの暗黙の了解のうちに扱われてきた感がある。青木和明氏は、壺形式の特徴と変遷過程の共通性から、栗林式と竜見町式が「同一様式」に属することを実証しようとした(青木 1992)。だがそれを継承した具体的な検証はこれまで十分に行われてきたとは言い難い。筆者も「竜見町式」として分離するだけの特徴が見いだせないと理由から、「栗林式」と呼称すべきと述べたことがある(大木 2003)。ただし、それは具体的な型式学的検討という手続きを経たうえで改称すべきであって、同一との思いこみに過ぎないのでなかつたかと自戒している。栗林式や北島式(吉田 2003)、また県東部に分布する「荒口前原遺跡土器群」(井上・柿沼 1977)などの型式的連鎖や編年での併行関係を明確にするためにも、急務の課題と位置づけられよう。該期の高崎市の豊富な出土資料が公表(柿沼・神戸 1999)されたことは、その好機を与えてくれたといえそうだ。

後期の土器としては、中部高地型櫛描文の定着した樽式が位置づけられる。時期細分は早くから着手され、現状では三期区分(佐藤 1988a・b、飯島・若狭 1988)が概ね容認されている。四期区分(三宅・相京 1982)も提唱されたが、古墳時代への移行期を第4期として認める以外は、それ以前の三段階の捉え方はほぼ同じと考え

られる。明瞭な型式差としては、この三期区分に落ち着くのだが、第3期は比較的長い時間幅をもっていたことが推測されるため、厳密な同時性や連続性の検討を要する集落分析などには十分ではない。富岡市中高瀬観音山遺跡や同市南蛇井増光寺遺跡では、第3期の住居同士が数棟に及んで重複する状況が知られ、3～4期細分することも可能だ（大木 1997）。その際に小地域色と時期差を誤認するおそれがあるため、対象を地域毎に絞った検討を積み上げていくしかない。

さて、県内弥生土器の編年見直しを進める中で、若狭氏は前期から後期までについて5大別11細分を行い、従来の前期を1期、中期を2・3・4期、後期を5期にあてる編年案を示した（若狭 1996）。型式認定や複数系統の整理などに課題を残すが、基本的な時間軸としてはほぼ変更の余地はないと考えられ、広域編年における他地域との対応関係もより明解になったといえる。あとは時期細分を進めるだけであろう。ただし、弥生地域社会を構成する集団単位を把握する手だてとして、錯綜する型式を解きほぐす作業は欠かせないはずである。今後の土器研究における最優先課題として位置づけられよう。

（2）集落論

県内で特に注目された集落遺跡としては、富岡市中高瀬観音山遺跡、沼田市日影平遺跡、高崎市高崎城遺跡をあげることができる。中高瀬観音山遺跡は防御的性格を帯びた「高地性集落」として注目を集めたが、保存措置が検討される過程で、「北関東における弥生時代の集落構造と社会状況を知るうえで貴重な遺跡」と位置づけられた（井上 2000）。「戦闘的（防御的）」な性格付けに偏らないよう、慎重に配慮した結果と推察する。だがその一方で、比高50mの丘陵上における狭小な場所に占地して、150棟をこえる住居群が密集する状況、高い鉄鏃の出土比率など、県内での一般的な後期集落とは異なる特殊性を忘れないでおく必要がある。150年近くは継続的だと推測されることから、緊急避難的性格は考えにくい。ならば、なぜこのような密集する居住地に固執したのか。中高瀬観音山遺跡だけを子細に検討しても答えは出まい。西毛地域の後期集落群の動勢を視野に入れた、地域弥生社会の枠組みのなかでの位置づけが必要だ。日影平遺跡は待望久しい報告書が刊行され、後期環濠集落の全貌が明らかにされた（小池 2003）。卵形のV字環濠で囲まれた住居30棟（うち2棟が濠外）で構成される居住区である。その性格について、本論文集所収の論考では「沼田弥生社会の防御的拠点」と想定したが、どうであろうか。高崎城遺跡は、中期後半の環濠がめぐり、その中央部に方形周溝墓と住居跡各1基が検出された（中村 1994、柿沼・神戸 1999）。県内最古例となる方形周溝墓は単独で中央に位置し、全体の約1/2しか判明していないとはいえ、住居が1棟しか確認できないことから、「居住

域」との認定に躊躇する。むしろ、集落一般構成員の居住域は他地点にあり、これは特定被葬者のための墓域ではないだろうか。その場合には隣接する竪穴住居も特別な意味を帯びてこよう。継続的に調査が行われている安中市注連引原II遺跡は、前期集落の実態を知りうる唯一例であり、これまでに5棟ほどの住居跡が検出された。短期間で終息し、一定期間を空けて再び集落が形成されることや、壺棺再葬墓及び土壙墓と思われる遺構の存在が判明している（小林・大工原・井上 2003）。今後のさらなる調査成果に期待したい。

県内における集落研究が低調ななか、若狭氏は榛名山南麓の井野川流域における後期集落の分布動向から、遺跡群の動態を把握し、地域における弥生社会の変遷の様相を明らかにした。いったん集中する傾向から、やがて台地・丘陵地域へ拡散すること（若狭 1989）、また古墳時代初頭期には、赤城山南麓地域への移住した可能性が高いことについても言及している（若狭 1998）。農耕集落であっても、けっして同一地点に定着・発展するだけでなく、実態としては遺跡群そのものの移動も想定しなければならないことを示した点で重要だ。開村→定着→拡大→拡散といった発展史觀だけでは歴史的事実を理解し得ないのである。問題となるのは、集団移動背景の解釈であり、若狭氏は西方からの外来集団の移入といった外因を想定している（若狭 1998）。これについては反対意見もあるが（友廣 2003a・bなど）、分析対象とする外来系土器の認識に双方でずれがあり、議論がうまくかみ合っていないとの印象を受ける。なお、若狭氏は中期後半の集落についても栗林式文化圏からの移住を想定する発言を行っており（若狭 2003）、その実証はこれから課題とはいえ、群馬県における本格的農耕文化の定着過程を理解する上で、非常に興味深い。

（3）生業と生産用具の問題

水稻栽培がいつ頃から主生業の座を占め、社会の在り方をどのように変えていったのかという問題は、弥生文化研究の当初から大きな命題であった。石器組成や立地景観、縄文文化の伝統の濃淡などの相違から、生業形態やその成熟過程にも地域色が顕在することが判明している。中期後半～後期には低湿地に面した立地条件と多数の水稻耕作用農具の出土から、水田耕作を行っていたことは確かだが、一方では打製石鋤・弓・石鏃・獸骨類の出土から、畠作や狩猟といった水田以外の生業の占める比率が高いとの論考も多い。特に石器組成に占める石鋤の多さから、生業における畠作の割合を高く評価する傾向が強い（熊野 1992、石川 1992、麻生 1990）。ただし、「畠優位論」が多く喧伝されるわりには、打製石鋤が畠耕作用に限定できる、との基本的的前提となる機能・用途論については充分な実証がされているとは思えない。使用痕の観察から、従来の「鋤」以外に直柄装着の

「縦斧」的使用法も想定されており（池谷・馬場 2003）、その実態解明にはまだ多くの議論を要する。また打製石鍬が減少あるいは消滅する現象についても、生業形態の変化とのみ直結させるのは早計ではないか。石器生産・供給システムや木製農具普及の条件等の、地域弥生社会の構造や動向を視野に入れた「石器農具論」の展開を望みたい。一方で、遺跡立地傾向の観点から生業の在り方を把握しようとの試みも行われている。能登・小島氏らは前期相当の遺跡立地を分析し、群馬県でもすでに前期段階から水稻栽培を目指していたことを説く（能登・小島 1989）。地理的条件を綿密に検討した上で彼らの分布論的研究は、当時の人間が何を目的として「そこに存在したのか」という問い合わせに対するひとつのアプローチとして、一定の成果をあげてきた。ただし、前期については集落をはじめとした発掘調査データに恵まれないことから、水田指向という結論を導き出せても、水田存在の実証に至るには、他の生業関連の遺物等による検証を要する。県内唯一の前期集落跡である注連引原II遺跡については、「畠作遺存型」との異なる見解（小林・大工原・井上 2003）もだされている。また、東海西部を除く中部地方ではイネの存在が縄文晩期に遡ることが判明していく中、「水稻農耕」の定着は中期半ば以降と捉える考え方（外山・中山 2001）も根強い。縄文社会から弥生社会形成への転換期において、生業実態の解明が最大論点であることは間違いないが、その実態に迫るにはまだ多くの実証的研究を積み上げる必要があろう。

生業以外の生産用具としては、日影平遺跡から出土した小型の磨き石が注目される。これを土器研磨用と考えれば、樽式土器製作の一端を読み解く貴重な資料となる。土器地域色の分布傾向と考え合わせ、基本的には自給生産と把握される樽式土器について、その供給範囲がどの程度なのかを推測することも可能だろう。

(4) その他

墓制や遺物の個別研究に関しては、平成12年段階での研究動向として扱ったことがあり（大木 2000）、こちらを参考にして頂きたい。ここではそれ以降の研究動向と新知見についての紹介に留めることにする。

墓制では、再葬墓を扱った宮崎・外山・飯島氏らの研究（1989、1995、1996）、有馬遺跡の礫床墓群の分析（田口 1996、飯島 1997）、方形周溝墓研究の総括（相京 1996）、壺棺墓群の発見（入澤 1999）がなされて以降、目立った研究の進展はみられない。方形周溝墓に関しては、周囲に溝をめぐらす住居跡との判別（飯島 2003）を通じて、改めて盛土の有無や規模、溝の形状、その意義などを再検討する必要に迫られているといえよう。また、渦巻文把手付鉄剣の発見で話題を呼んだ、長野県木島平村根塚遺跡での墳丘墓の存在は、共通する土器文化圏であることを重視すれば、群馬県でも同様の墓が存在した

可能性を示唆するものとして注目しておきたい。副葬品に関して田口氏は、有馬遺跡礫床（木棺）墓の鉄剣やガラス及び水晶小玉から、丹後地域との交流を強調した（田口 2002）。先進的な文物の伝播や搬入に関しては、漠然と“西方から”とすることの多かった従来の認識から、具体的な地域とルートを示すことで、遠隔地を含めた地域社会間の実証的な交流論・伝播論を志向するものとして高く評価できよう。

個別の弥生遺物については、石器・鉄器・木器・骨角製品などに関する緒論があげられる。

石器については、大塚昌彦氏が県内の環状石器を集成しその時期と分布傾向について言及した（大塚 1995、1996、1998）。また環状石器については、岡本孝之氏によって、縄文時代以来の伝統的石器であり、「橋場型石器」と改称すべきとの意見が述べられた（岡本 2000）。一方、大陸系磨製石斧の研究について、県内での集成作業（平野・相京 1992）以降は進展が見られないが、長野市榎田遺跡の分析（町田 1999）から提唱された「榎田型磨製石斧」（馬場 2001）に県内出土例の大半が該当しており、長野県北部との直接的な流通形態を解明する大きな手がかりを得たといえよう。磨製石鏃について関東一円の出土例を総括した及川良彦氏は、武器としてよりも狩猟・漁労具の可能性を求めた（及川 2002）。群馬県では確かに急増現象や重量化などの変化は今のところ見られず、「戦争」を背景とした武器説は考えにくい。ただし実際の使用に際して狩猟・漁労具と武器の違いがどれだけ意識されていたかを想定するのは難しい。狩猟・漁労具ならば打製から磨製への転換の背景が気になるところだ。鉄器に関しては、出土例が少ないことも災いして研究の進展はあまり見られない。後期に石器から鉄器への転換が行われたのは、後期遺跡における磨製石器の減少と鉄器出土例から明らかだ。鉄製利器が後期後半（2～3世紀）すでに広く普及していたことは、樽式分布圏のなかで最北辺にあたる白沢村寺谷遺跡住居出土の板状鉄斧例や、県内各地に見られる鉄鏃出土例からも窺うことができる。長谷川福次氏は、特定地域集中の鉄剣、河川流域散在の鉄鏃と、鉄器種と分布傾向の違いを指摘した（長谷川 1997）。前者は墓副葬品、後者は集落跡という遺存形態に左右された可能性も考えられ、本来の所有傾向と異なることも推測されるが、判明している鉄鏃出土例が河川流域でも樽式圏周縁に目立つことは、当時の社会情勢と関連づけて検討すべきかも知れない。木器では樋上昇氏による「東海系曲柄鍬」に関する分析が注目される（樋上 2000a・b）。氏によれば、新保・日高遺跡出土の曲柄鍬のうち、弥生V期（樽式に相当か）では在地系、廻間II式併行期から東海系に変質するという。東海系土器の東方波及とリンクさせた議論が予想されるが、それだけに在地系曲柄鍬の分析が今後の重要な課題

となろう。新保遺跡・新保田中遺跡は木製品以外にも、多くの骨角製品が出土したことで知られる。石守晃氏は弓彌状有栓骨角製品を取り上げ、形態分類や系統について再検討を行い、その用途については楽器の原点ともいえる「音器」としての性格を与えた（石守 1994）。最後になったが東日本出土の銅鉗・鉄鉗について、野澤誠一氏は西日本とは異なる独自の装飾具と解すべきであり、その生成と波及に長野県千曲川流域の弥生社会が主体的な役割を果たしたと結論付けている（野澤 2002）。後進的であるとして過小評価されることの多かった東日本の金属器について、弥生文化の地域性を解明する独自の研究対象となりうることを示した点、大いに評価できよう。

参考文献

- 相京建史 1996 「群馬県の方形周溝墓」『関東の方形周溝墓』山岸良二編
青木和明 1992 「土器様式の構造からみた中部高地と北関東」『駿台史学』84
麻生敏隆 1990 「弥生時代の石製農具」『研究紀要』7 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
荒巻 実・若狭 徹ほか 1986 「C11沖II遺跡」藤岡市教育委員会
飯島克巳・若狭 徹 1988 「樽式土器編年の再構成」『信濃』40-9
飯島義雄 1997 「墓が壊されることの意味」『群馬県立歴史博物館紀要』18
飯島義雄 2003 「大間々扇状地の扇端低地に立地する唐桶田遺跡における『方形周溝墓』の再検討」『利根川』24・25
池谷勝典・馬場伸一郎 2003 「弥生時代飯田盆地における打製石鍬の用途について」『中部弥生時代研究会第6回例会発表要旨集 生業』
石川日出志 1985 「関東地方初期弥生式土器の一系譜」『論集日本原史』
石川日出志 1992 「関東台地の農耕集落」『新版古代の日本 8 関東』
石川日出志 1996 「東日本弥生中期広域編年の概略」『YAY! 弥生土器を語る会』
石川日出志 2003 「神保富士塚式土器の提唱と弥生中期土器研究の意義」『土曜考古』26
石守 晃 1994 「弓彌状有栓骨角製品について」『群馬考古学手帳』4
井上唯雄・柿沼恵介 1977 「入門講座 弥生土器—北関東2—」『考古学ジャーナル』141
井上 太 2000 「弥生時代遺跡の整備 群馬県中高瀬観音山遺跡」『考古学ジャーナル』458
入澤雪絵 1999 「土器棺墓群について」『小八木志志貝戸遺跡群 I』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
及川良彦 2002 「有孔磨製小形尖頭器」『研究論集』XIX 東京都埋蔵文化財センター
大木紳一郎 1997 「まとめ 弥生時代の遺構と遺物」『南蛇井増光寺遺跡V』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
大木紳一郎 2003 「群馬県における弥生中期後半の遺跡」『埼玉考古別冊7 埼玉考古学会シンポジウム 北島式土器とその時代』
大塚昌彦 1995 「弥生時代のおとしもの」『群馬考古学手帳』5
大塚昌彦 1996 「群馬県の環状石斧」『群馬考古学手帳』6
大塚昌彦 1998 「群馬県の環状石斧(補)」『群馬考古学手帳』8
岡本孝之 2000 「関東の環状石斧」『西相模考古』9
柿沼恵介 1990 「弥生文化の伝播と展開」『群馬県史 通史編1』
柿沼恵介・神戸聖語ほか 1999 「新編 高崎市史 資料編1」
熊野正也 1992 「北関東地方西部弥生時代における山高地遺跡と石器」『駿台史学』84
小池雅典 2003 『日影平遺跡』沼田市教育委員会
小林青樹 1998 「弥生文化成立期の西と東」「氷遺跡発掘調査資料図譜」
小林青樹・大工原 豊・井上慎也 2003 「群馬県安中市注連引原遺跡群における弥生時代前期集落の研究」『日本考古学協会第69回総会研究発表要旨』
表要旨】
小出輝雄 2003 「関東初期弥生土器の一様相」『埼玉考古』38
佐藤明人 1988 a 「出土弥生土器について」『新保遺跡II』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
佐藤明人 1988 b 「樽式土器の様式推移と地域色」『創立十周年記念論集 群馬の考古学』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
設楽博巳 1986 「竜見町式土器について」『第7回三県シンポジウム 東日本における中期後半の弥生土器』
設楽博巳 1991 「関東地方の遠賀川系土器」『児嶋隆人先生喜寿記念論集古文化論叢』
鈴木正博 1987 「『流れ』流れて北奥「遠賀川系土器」」『利根川』8
鈴木正博 2002 a 「『白倉』と『関所裏』の筒形土器に観る型式学的引力」『群馬考古学手帳』12
鈴木正博 2002 b 「関東弥生式中期中葉の突起文と筒形土器の型式学」『日本考古学協会第68回総会研究発表要旨』
関 義則 1983 「須和田式土器の再検討」『埼玉県立博物館紀要』10
大工原豊・若狭 徹他 1988 「注連引原II遺跡」安中市教育委員会
田口一郎 1996 「樽式期の墓制」『群馬考古学手帳』6
田口一郎 2002 「金属器・玉類副葬の北関東弥生墳墓」『考古学ジャーナル』491
友廣哲也 2003 a 「北関東古墳時代前期土師器の様相から見た古墳時代社会の成立」『古代』112
友廣哲也 2003 b 「古墳社会の成立」『日本考古学』16
外山秀一・中山誠二 2001 「プラント・オパール土器胎土分析からみた中部日本の稻作農耕の開始と遺跡の立地」
中村 茂 1994 「高崎城三ノ丸遺跡」高崎市教育委員会
野澤誠一 2002 「銅鉗・鉄鉗からみた東日本の弥生社会」『長野県立歴史館研究紀要』8
能登 健・小島敦子 1989 「関東地方における弥生時代前期集落の選地について」『研究紀要』6 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
長谷川福次 1997 「北関東弥生時代の鉄器文化」『土曜考古』21
馬場伸一郎 2001 「南関東弥生中期の地域社会(上)(下)」『古代文化』53-5・6
樋上 昇 2000 a 「東海系曲柄鍬再論」『考古学フォーラム』12
樋上 昇 2000 b 「3~5世紀の地域間交流」『日本考古学』10
平野進一・相京建史 1992 「群馬県出土の弥生時代磨製石斧」『群馬県歴史博物館紀要』3
町田勝則 1999 「考察」「榎田遺跡」長野県埋蔵文化財センター
三宅敦氣・相京建史 1982 「樽式土器の分類—榛名山東南麓を中心として」『第3回三県シンポジウム 弥生終末期の土器 四世紀の土器』
宮崎重雄・外山和夫・飯島義雄 1989 「再葬墓における穿孔人歯骨の意味」『群馬県立歴史博物館研究紀要』10
宮崎重雄・外山和夫・飯島義雄 1995 「弥生時代後期の葬制における再葬墓の伝統」『群馬県立歴史博物館研究紀要』16
宮崎重雄・外山和夫・飯島義雄 1996 「岩櫃山岩陰遺跡群の再検討」『群馬県立歴史博物館研究紀要』17
吉田 稔 2003 「北島式の提唱」『埼玉考古別冊 7 埼玉考古学会シンポジウム 北島式土器とその時代』
若狭 徹 1989 「井野川流域を中心とした弥生時代後期遺跡群の動態」『群馬文化』220
若狭 徹 1992 「北西関東における弥生土器の形成と展開」『駿台史学』84
若狭 徹 1996 「各地期の編年 群馬県地域」『YAY! 弥生土器を語る会』
若狭 徹 1998 「群馬の弥生土器が終わるとき」「第2回特別展 人が動く・土器も動く」かみつけの里博物館
若狭 徹 2003 「第三章 弥生時代」『安中市史 第二巻 通史編』

4 古墳時代 一古墳を中心にして一

右島和夫

はじめに

ここでは近年の群馬県地域における顕著な古墳時代の考古資料状況及び研究動向について概述し、特に古墳の調査・研究の成果を中心に、折に触れてそれ以外の同時代の資料等にも言及したい。筆者のこれまでの主たる関心対象が古墳そのものにあったためであり、御容赦願いたい。また、紙数の関係もあり、そのすべての研究成果に触れられなかった点もお断りしておく。その欠については、毎年『日本考古学年報』、『考古学ジャーナル』、『信濃』誌上等で前年度の当地域の古墳時代の研究動向が、また『群馬文化』誌上で5年ごとにその間の研究動向が詳細に総括されているので、これらを参考されたい。

注目された古墳の調査

古墳の発掘調査は、もともと各古墳が視認できることもあって、近年は開発計画が、事前に古墳を避けるように計画されることが大半である。そのため、従来のような調査は減少している。一方、開発規模自体は大きくなっているため、その存在が事前に想定されていなかつた大規模古墳群が、調査の結果確認される事例は多くに上っている。これらは、いわゆる「初期群集墳」と呼称されており、群を構成する個々墳が低墳丘であるため、現地表面上に墳丘が突出することがほとんどなかったからである。世良田諷訪下遺跡（以下、そのうちの古墳群のみについて「世良田諷訪下古墳群」と呼称する）、高崎市情報団地遺跡（同「情報団地古墳群」）、同剣崎長瀬西遺跡（同「剣崎長瀬西古墳群」）等が代表的である。

一方、事前に視認できるような高墳丘の有力古墳についても発掘調査される機会があった。その多くの場合は、史跡整備や史跡指定を視野に入れた重要遺跡の範囲確認調査等の基礎調査であり、そのことによって基準となるような主要古墳の基礎的データが集積された。その主なものとしては、前橋市大室古墳群（前二子・中二子・後二子・小二子古墳からなる）、群馬町保渡田古墳群（二子山・八幡塚・薬師塚古墳からなる）、高崎市山名古墳群等がある。また、安中市の築瀬二子塚古墳もこのような方向性も踏まえて基礎的調査が実施された。

（1）古墳群の調査

初期群集墳の調査が活発に行われたことにより、その具体相が明らかになり、成立背景の検討が可能になってきた。初期群集墳の埋葬施設は、主として人体ぎりぎりが納まる空間のみの竪穴式小石槨であり、五世紀後半から六世紀前半にかけて形成される特徴を有している。ところで、同じ六世紀初頭の時期は、一方で横穴式石室が

新たな主体部形式として登場する。その場合、群馬県の中・西部地域は、この流れに沿った主体部形式の転換が見られるのに対し、東部地域では六世紀後半にならないと横穴式石室は登場しない。それでは、前者の地域では、手のひらを返すように主体部形式が竪穴式から横穴式に替わったのかというと、実際は非常に複雑な様相を示している。そのことをよく示しているのが、初期群集墳の調査成果であり、地域により、古墳の規模（被葬者の階層）により多様である点が明らかになってきた。

具体的には、群馬県の中・西部では前方後円墳、帆立貝式古墳、比較的大型の円墳に採用されても、群集墳を構成する小型円墳は依然として竪穴式小石槨を採用。群集墳を構成する小型円墳にも広く採用。前方後円墳以下群集墳まで不採用等のいくつかの導入形態が見られることが明らかになってきた。その背景には、地域共同体の中で、群集墳造営のシステムの転換がどのようになされていったのかが密接に関係していることは明らかである。今後も初期群集墳の発見と調査が県内各地で事例を増すことは明らかであり、5世紀後半から6世紀前半の地域動態解明の大きなカギを握っていると言えよう。

高崎市剣崎長瀬西古墳群の調査で発見された方墳・方形積石墓（古墳の一形態として位置づけられる積石塚から区別するため「積石墓」と呼称した）は、主として5世紀後半の当地域への渡来系集団の移動の問題を大きくクローズアップさせた点で重要であった。古墳群の一角から発見された馬葬土壙は、渡来系集団の移動背景の一端を示唆している。併せてその周辺で発見されている集落跡からは、初期カマドや半島系軟質土器が多く確認されており、集団の系譜の具体的検討に道を開いている。

子持村伊熊有瀬遺跡は、昭和2、30年代の調査で、6世紀中葉降下の榛名山ニツ岳軽石層(FP)に直接厚く覆われた小型円墳伊熊古墳、有瀬1・2号古墳が確認されており、その遺存状況のよさが注目されてきた。子持村教育委員会による周辺一帯の地下レーダー探査によると既調査の3古墳以外の円墳が複数基確認されている。

伊熊・有瀬古墳群以外でも子持村域には、軽石層によって全体がパックされている古墳が分散しており、中ノ峯古墳、田尻遺跡、浅田遺跡等の調査が行われている。その中には、噴火直前よりさかのぼる時期に建築された古墳も含まれるが、建築後の破壊はほとんど被っていないので、降下直前建築のものと同様遺存状況のよさは特別である。集落研究の中で黒井峯遺跡が基準資料として重視されているのと同様に古墳研究の中で重視していく必要があるし、発掘調査の方法如何で解明できる要素は無尽蔵である。今後に期待したい。

伊熊・有瀬古墳群とは利根川を挟んだ対岸をしばらく上流へ行ったところで発見された昭和村岩下清水古墳群の3基の小型古墳は、いずれも榛名山ニツ岳軽石層に直

接覆われており、そのあり方が極めて興味深いものであった。うち1・2号墳の2基は、一辺が約5mの小型方墳で、墳丘が石のみで構成されている積石塚だった。この時期の群集墳の墳丘形式としては極めて類例が少ないことと、隣接する円墳の3号墳の方が、墳丘・石室において明らかに優勢であることから、両者の背後に社会構成上の特別な関係が反映されている可能性が強い。その場合、剣崎長瀬西古墳群、箕郷町下芝谷ツ古墳、渋川市東町古墳等の5世紀後半の方墳が渡来系集団に関する出自背景が墳丘形式に反映していると考えられることから、そのような出自表示の方法が、岩下清水古墳群の段階まで継続していた可能性が考えられるところである。

利根川上流域では、昭和村川額軍原I遺跡、沼田市奈良古墳群、川場村生品古墳群等、7世紀を中心とした群集墳の本格的調査が続いた。これらの古墳群に共通するのは、馬具・武器類の充実した副葬品である。古墳群の性格理解やこの時期を前後して活発となる東北地方へのヤマト政権の軍事的進出との関係に興味が持たれる。

赤堀町多田山古墳群の調査も興味深い話題を提供している。古墳群は、広大な多田山丘陵の中に各時期の古墳群が場所を変えて築造されており、丹念な調査によって多大な成果を上げている。最も古いのは、いわゆる初期群集墳に属する一群であり、墳形・同規模・主体部形式・埴輪等の比較検討から、群構造の具体的検討を可能にしている。横穴式古墳については、6世紀後半、7世紀の群集墳が場所を変えて形成されており、個々墳の構造的特徴の把握に意が注がれた。また、頂上部寄りを中心とした一角には、群集墳から明確に区分された截石切組積石室を有する円墳3基が確認された。そのうちの1基の前庭部から唐三彩陶枕が発見され、話題を呼んだ。極めて希有な資料であるだけに、その入手経路・背景に興味が持たれるところである。

調査担当者が慎重に検討している「モガリ状遺構」は、遺構に伴う情報が豊富であることから、今後この種の遺構の研究で基準資料となることは間違いない。

(2) 有力古墳の調査

前方後円墳を中心とした有力古墳の発掘調査が活発に行われている。その背景として、市町村教育委員会による史跡整備計画が、古墳を対象に策定される機会が多くに上っていることがある。早くには藤岡市白石古墳群、群馬町保渡田古墳群、太田天神山・女体山古墳が、埴輪公園整備構想の3本柱として俎上にのぼり、それぞれ整備のための基礎調査が実施してきた。

とりわけ保渡田古墳群、とりわけ八幡塚古墳については、具体的な整備構想の策定を視野に意欲的な調査が実施され、全国的に見ても範となるような調査研究に結実している。それは墳丘及び外部施設の完全復元を目指し

たため、その細部に至るまでの必要な基礎的データが採取された。このことは、古墳そのものについての考古学的理解につながったことは言うまでもないところであり、今後該期の前方後円墳の基準資料となっていくことは十分予測されるところである。

前橋市大室古墳群の基礎的調査も長期に亘って組織的・計画的に実施され、古墳群理解を一段と深めることができた。本来的には、史跡整備のための基礎的調査に主眼がおかれていたわけであるが、実際の調査を主導する市教育委員会事務局に対して、調査行程の節目節目の都度頻繁に、整備委員会に関わる考古学のメンバーが現地で確認し、調査の評価、その後の調査方針を検討していくという調査体制が取られた点は特筆されてよいであろう。各古墳についての調査報告書は順次刊行され、基本文献として活用されている。今後、古墳群全体に対する総括的な報告書作成が期待される。

一方、関東地方最古の横穴式石室を有する前方後円墳である安中市築瀬二子塚古墳については、市史編纂事業及び史跡整備を視野に入れての基礎調査、市道改良工事に伴う事前調査等が実施され、墳丘及び外部施設、横穴式石室、出土遺物等についての基礎的データが集積された。古墳が築造された6世紀初頭を前後する時期は、当地域の中・西部地域の有力古墳が一斉に横穴式石室を採用する時期である。古代史上では、ほぼ繼体朝の時期に当たっており、ヤマト政権が大きく転換していく画期の中にいることが知られている。その意味からも、調査により当古墳の基礎的データが集積された意義は研究上からも極めて大きい。

完成する大冊の調査報告書

近年、いくつかの大冊の調査報告書が刊行された。このことの背景には、調査の規模が大きくなり、群集墳のほぼ全域が調査された世良田諫訪下古墳群、情報団地古墳群、古海松塚古墳群、箕郷町和田山古墳群、多田山古墳群等がある。これらについては、対象となる古墳群の全域が調査されたことも一因であるが、と同時に古墳群自体の規模も極めて大きかった点が上げられる。このような古墳群を構成する1基1基に対して慎重な調査を実施した担当者の方々の労をねぎらうとともに、膨大な資料を整理し報告書刊行にこぎつけたことに対しても敬意を表したい。これら全体像が把握できる群集墳の資料の集積を基礎にして、当地域の群集墳研究がさらに活発に展開されるであろう。

なお、高崎市の倉賀野東古墳群（大道南古墳群）は、総数100基以上からなる後期大型群集墳で、そのうちの18基が昭和42年に発掘調査されたが、未整理・未報告のままに今日に至っていた。近年、高崎市史編纂事業の一環として調査資料の基礎整理が実施され、『高崎市史研究』

の三つの号を割いて、その報告に当たった。大冊の報告書に匹敵する成果である。

長い間、正式の報告書刊行が待ち望まれてきた綿貫觀音山古墳の膨大な調査資料が整理され、正しく大冊の報告書2冊に結実したことは、学界から大いに注目された。墳丘・石室については、かって刊行された史跡整備報告書の中で、詳細に報告されたところであるが、出土資料については、今回はじめて基礎的整理がほぼすべてに及ぼされた。客観性を極めて重視し、確実性を越えることを抑制した方針が垣間見え、報告書の内容の信頼度を高めている。今後、本古墳研究の基本文献として広く活用されることは間違いない。

保渡田古墳群の史跡整備に伴う報告書も大冊のものとして完成した。あくまでも、史跡整備を前提とした調査・報告書作成ではあるが、その根底に考古学的検討の徹底がいかに必要かを雄弁に物語っている。古墳調査の成果に周辺の関係遺跡（三ツ寺I遺跡、その他の集落遺跡、生産遺跡等）の構造的理解を史跡整備・博物館建設に繋げている点も示唆的である。なお、最近三ツ寺I遺跡に若干後出する時期に造営された、ほぼ同一企画・規模の北谷遺跡が約3km東方で発見され、現在基礎調査が続けられている。この遺跡の位置づけについても多角的なアプローチと根底的な検討がなされていくと期待される。

活発な市町村史（誌）編纂

『群馬県史』編纂事業の完成によって、群馬県地域の考古学的地域研究の基礎が築かれたことについては、異論を挟む余地はないだろう。県内の市町村で遺跡調査が本格的に進行したのは、この編纂事業の中途から終了以降にかけてのことである。そのため、県史には反映されなかった基礎的データが各市町村、埋文事業団で大量に集積されていった。これらの膨大な資料を吸収するかたちで、各地で市町村史（誌）の編纂事業が始動していったことが顕著な動きとして特筆される。ここでは、特に古墳時代資料との関係で注目される動向について触れてみることにしよう。

代表的な例として、『高崎市史』、『太田市史』、『渋川市誌』、『藤岡市史』、『沼田市史』、『安中市史』、『群馬町誌』等が上げられる。この他、県史編纂事業と相前後して進行した市町村史（誌）編纂事業もある。

これらの中で、埋蔵文化財調査の成果を集約するだけにとどまらず、積極的に編纂事業を展開したものとして『高崎市史』、『沼田市史』、『安中市史』等がある。

『高崎市史』を例に取ると、今完成間近であるが、古墳時代に関しては、『原始古代資料編I』縄文・弥生・古墳（古墳）、『同II』古墳（集落・生産）・古代、及び『通史編I』原始古代の大冊3冊となる。内容で特筆されるのは、古墳の悉皆分布調査を実施し、『上毛古墳綜覧』の

高崎市域の改訂版を詳細分布地図とともに作成したことである。また、これまで良好な測量図のないものや重要古墳について改めてその作成及び一部発掘調査を実施した点である。主なものとしては、普賢寺裏古墳、八幡二子塚古墳、觀音塚古墳、漆山古墳、蟹沢古墳、高崎1号墳、大山古墳、安楽寺古墳がある。また、市教育委員会によって調査は実施されたが、その後出土遺物等の基礎整理がなされていなかった古墳のほぼすべてについて資料化をはかっている。主なものとしては、若宮八幡北古墳、八幡原古墳群、倉賀野東古墳群（大道南）等の膨大な資料がある。一方、高崎市域出土が伝えられ、県外に所蔵されている資料の基礎調査も特筆される。その主なものは、東京国立博物館に所蔵されている大量の遺物であるが、そのほぼすべてについて資料化を行っている。その作業は、宮内庁書陵部、天理参考館、伊勢神宮徵古館等にも及んでいる。

編纂のための基礎調査に長期間の歳月と予算がつぎ込まれたことが裏付けになっている。

参考文献

- 群馬県『群馬県史』資料編3・通史編1 1981・91
- 尾島町教育委員会『世良田諏訪下遺跡』1998
- 高崎市教育委員会『高崎情報団地遺跡』・『同II遺跡』1997・2002
- 高崎市教育委員会『剣崎長瀬西遺跡1』2002
- 専修大学文学部考古学研究室『剣崎長瀬西5・27・35号墳』2003
- 前橋市教育委員会『前二子古墳』・『中二子古墳』・『後二子古墳』・『小二子古墳』1993・95・92・97
- 群馬町教育委員会『保渡田VII遺跡』・『保渡田古墳群』1990・2000
- 石井克己「火山爆発による軽石埋没の方形周溝墓と古墳群調査について」『月刊文化財』平成13年3月号 2001
- 昭和村教育委員会『岩下清水古墳群』2003
- 昭和村教育委員会『川額軍原I遺跡』1996
- 沼田市教育委員会『奈良古墳群』2001
- 群馬県埋蔵文化財調査事業団『多田山古墳群』2004
- 安中市『安中市史』資料編・通史編・原始古代中世 2002・2003
- 柳沢一男・徳江秀夫・南雲芳昭ほか「倉賀野東古墳群大道南群調査報告（上）（中）（下）」『高崎市史研究』15・16・17号 2001・2003
- 群馬県教育委員会・群馬県埋蔵文化財調査事業団『綿貫觀音山古墳I墳丘埴輪編』・『同II石室遺物編』1998・99
- 高崎市『高崎市史資料編』原始古代I・II・『同通史編』原始古代 1999・2000・2004
- 太田市『太田市史』通史編原始古代 1996
- 渋川市『渋川市誌』第2巻 通史編 原始～近世 1993
- 藤岡市『藤岡市史』資料編 原始古代中世・『同』通史編 原始古代中世 1993・2000
- 沼田市『沼田市史』資料編・通史編 原始古代中世 1995・2000
- 群馬町『群馬町誌』資料編・通史編 原始古代中世 1998・2001

5 古代

飯田陽一

はじめに

「古代」と括られる範囲には、多様な遺構と遺物が含まれている。それらを網羅すれば膨大な調査成果や考察があるが、ここでは古墳を除く7世紀後半から11世紀末頃までを対象とした。また、この10年間、主に1995年以降に発表された考古資料や論考を扱った。文献資料に基づく論考も割愛した。

現在、古代の遺構・遺物を扱う全国規模の研究会には「古代の土器研究会」「地方官衙研究会」「古代交通研究会」「窯跡研究会」などがあり、東日本各地で行なわれる「古代城柵官衙遺跡検討会」「関東古瓦研究会」などがある。また広範な時代を扱うが「埋蔵文化財研究集会」や「東日本埋蔵文化財研究会」が作成する豊富な資料には研究の助となるものが多い。

群馬近県の考古学会でも古代の土器・官衙研究など活発な活動が見られるが、群馬県内にあっては、このように全県をあげて研究者が集うような企画は見られない。

1 官衙 1995年の日本考古学協会・茨城大会で地方官衙がテーマとして取り扱われたこともあり、官衙や居宅は最も活発に検討が加えられている分野のひとつである。この大会で群馬県の事例は木津博明がまとめている¹⁾。大会以降、さらに資料の増加もあって、近県では博物館の企画展・地域のシンポジウム等で扱われることも多くなっている²⁾。

安中市地尻植松遺跡で発見された「評」と刻書された須恵器³⁾が注目される。限られた調査範囲ではあるが、大形掘立柱建物群が確認され、碓氷郡衙かそれに先行する評家の可能性が指摘されている。周辺は以前より東山道野尻駅家の推定地域でもあった。評家については前橋市山王廃寺に先行する評家の想定もある⁴⁾。

ところで、かつて群馬を代表する官衙として境町十三宝塚遺跡が佐位郡衙跡と位置付けられていたが、その後、同遺跡の調査報告書⁵⁾で佐位郡衙に付随する寺院と位置付けられた。また、勢多郡衙政庁の可能性を期待された前橋市上西原遺跡方形区画も同様に郡衙に伴う寺院と報告された⁶⁾。関東地方では郡衙の発見が相次いでいるが、群馬県内でこれらに匹敵する典型的な施設が未だに報告されていない。コの字状やL字状の建物配置の政庁、および築地塀で囲まれた区内に多数の穀倉をもつような正倉院を伴う典型的な郡衙ではなく、群馬独特の郡衙の存在を想定しながらこれまでの発掘事例を再検討する必要があるのではなかろうか。

このような中で継続的に調査されている新田町天良七堂遺跡・同町入谷遺跡や境ヶ谷戸遺跡の調査成果の蓄積

は期待されるものが大きい⁷⁾。

今後は、古代史からは否定的な見解をよせられることの多い官衙的な役割を担う郷家の存在についても考古学側からのアプローチが必要と思われる。郡衙・居宅などと確定することはできないが、官衙的な色彩の強い遺構・遺物はかなりの数にのぼってきている。

なお、近年は言及される機会の減った国府についても、若干の考察がある⁸⁾。

2 東山道駅路 従前より、坂爪久純によって精力的に研究されてきている分野である。2000年に群馬県立歴史博物館で東山道の企画展⁹⁾が行なわれたほか、栃木県でも同様の企画¹⁰⁾が催されるなど、発掘資料の増加に伴う再検討が行なわれ、関心の高い分野である。また、東山道を南へ分岐して武藏国府へ向う武藏路の実態が東京・埼玉で明らかになってきているが、群馬県内での調査例はまだない。

発掘調査でもこれまでいわれてきた上野国府を通過する国府ルートと、南側を直線的に横切る牛堀・矢の原ルートの存在が明らかになり、南側のルートが国府ルートに先行すると提唱されている。しかしながら、規模・規格性の具備をもって東山道駅路とすることに慎重な指摘¹¹⁾もある。国府と東山道駅路の関係をより具体的に説明する必要が感じられる。駅家自体も確実なものが確認されていない。これは群馬県内だけでなく、関東全域で見ても確実な駅と呼べる遺構はまだ調査されていないのではなかろうか。山陽道や北陸道に見られる、外国からの使節に対応した典型例施設を東国の駅家に求めることに原因があるよう思われる。東山道の駅家には内部に宿泊施設を伴うのか、馬屋を併設しているのか、近隣の郡衙や居宅との連携があるのか、など基本的な問題が未だに判っていない。

3 寺院と遺物 埋蔵文化財研究集会では1998年に古代寺院の出現とその背景をテーマとしている¹²⁾。関東古瓦研究会はこれまでの成果をまとめ、上野国分寺については木津博明が担当している¹³⁾。上野国分寺に関連した施設については、桜岡正信・関口功一によって再検討が加え続けている¹⁴⁾。発掘調査では、山王廃寺から多量の塑像片の出土があり、同寺の特殊性がさらに際立ってきている(15前)。また赤城村諏訪上遺跡の山岳寺院と瓦塔¹⁵⁾が注目された。

瓦の研究については資料が多いが¹⁷⁾、本紀要中には高井佳弘の詳細な記載があるので、参照して頂きたい。

4 集落 研究の停滞している分野である。関口功一の検討¹⁸⁾、や緑釉陶器検討から古代の集落の成立時期や背景に言及した神谷佳明¹⁹⁾が注目される。

官衙と一般集落の間にある居宅についても取り扱われる機会が増えてきている。律令期の居宅として高崎市小八木志志貝戸遺跡²⁰⁾などで可能性が指摘されている。

また、近年関東各地で活発に検討される村落内寺院については、村落内寺院という名称についても疑義が出されるという研究の進捗の中で、群馬県内では検討される機会が少ない。かつて、かつて鳥羽遺跡で注目された神社遺構を含め、集落と宗教の係わりについての問題を整理する必要があろう。

その他に竪穴住居についての分析として、竪穴住居内での竈の位置移動についての再検討²¹⁾や、復元竪穴住居の焼失実験報告²²⁾・掘削方法の検討²³⁾など、論考が多い。

5 水田・畠 火山堆積物下の水田確認は飛躍的に進歩している。昭和50年代はじめ、関越自動車道や上越新幹線などの発掘調査では台地上面のみで調査が行われていたのに対し、北関東自動車道の調査では河川跡を除くほぼ全域で低地部分から水田が見つかっている。火山灰直下の状況が判るという環境に恵まれた群馬は、古代の水田調査データが最も豊富といえよう。

条里期水田に先行する古墳時代の小区画水田に対する論考は多く、坂口一の畦畔に対する考証、斎藤英敏の東アジアにまで視野を広げた大胆な検討などがある²⁴⁾。また深澤敦仁の水田出土遺物の検討もある²⁵⁾。

天仁元（1108）年 As-B 下水田に対する検討の資料の蓄積は膨大なものになっている。能登健・小島敦子による水田・畠集成作業²⁶⁾で扱われた486遺跡中、As-B直下の水田は不確実なものを含むと333遺跡におよんでいる。あわせて、弘仁九（818）年の地震を原因とする泥流下の水田遺構の確認は、条里期水田の検討に大きな成果を期待させるものとなるのみでなく、洪水下の遺構に対しより精度の高い調査を喚起した。赤城山南麓から前橋台地の遺跡のみならず、洪水堆積物は前橋台地西隅の高崎市内でも注意をはらわれるようになってきている。加えて数次の洪水に対する可能性も示唆されるようになっている。北関東自動車道などの調査報告書が刊行される中、前橋・伊勢崎台地の広大な条里期水田の資料が整理されつつあり、検討が加えられる機会が増えてきている²⁷⁾。從来から調査例の多い高崎市・群馬町の水田を加えて全国的にも希有な規模で条里期水田の分析が可能となり、最も期待される分野のひとつと言えよう。

畠については2000年の日本考古学協会鹿児島大会で能登健・小島敦子が発表している²⁸⁾。水田イメージが先行していた群馬の農耕遺跡に2本柱をアピールした。

農業用水についての飯島義男の継続的な取り組み²⁹⁾なども注目されよう。これまでに集積された史料再検討の必要性を喚起している。

6 その他の遺構 これまで最も考古学的なアプローチが遅れていた分野のひとつである古代の牧について、問題提起がされるようになってきた³⁰⁾。牧を想定するには土壘・柵・堀などの発見の他に、広大な遺構のない面を確認するという、他の遺構確認とは正反対の、困難で息

の長い作業が必要である。地域の歴史解明に固執する市町村担当者の努力なしでは解明できないテーマであろう。加えて牧を確定するための確実な遺構・遺物に対する共通認識を求めたい。埋蔵文化財研究集会で集成された地震の痕跡について、群馬の資料については関晴彦がまとめている³¹⁾。

7 土器 昭和50年代、活発に行なわれた全県下の編年作業により、土器の示す相対的な先後関係は確立されてきた。これを受けて地域ごとの編年作業の必要性が唱えられたが、この作業には進捗が見られない。かつて、他地域からの土器年代観の援用が、その地域での見直しの波を受けることを繰り返し経験しながら、地域ごとの着実な編年作業の必要性が叫ばれた。先後関係を測る物差しとしての土器編年は完成し、絶対年代により近い、細かく正確な年代を測る物差し、地域性を計る物差しとしての土器研究が必要となっている。羽釜に対し、吉井型・月夜野型の分類がおこなわれたのもこの時期である。その中で個別の土器種を中心とした分析作業が行なわれている。暗文土器の検討、群馬独特の須恵器有蓋短径壺の検討、個別の土器や土器種の生産や流通にいたる検討など、地域を計る物差しを完成させるためのステップが着実に践まれている³²⁾。

須恵器窯では光仙房遺跡須恵器窯跡の報告書³³⁾が刊行されている。舞台遺跡や三和工業団地遺跡の窯跡資料とともに、消費地に隣接した“里の須恵器”を焼成する須恵器窯と、その製品の流通範囲を検討することが可能となった。周知の窯業製品とを対比し、新たな須恵器研究の端緒となろう。なお、窯跡研究会が行なった8世紀の須恵器窯集成で、群馬の資料は渡辺一がまとめている³⁴⁾。

8 その他遺物 紡錘車の研究、刻書紡錘車に着目した論考も、発火具についての地道な集成作業などがある³⁵⁾。文字資料については次々と論考が発表されている。群馬県出土の文字集成作業が第3集³⁶⁾として久々に刊行されている。また高島英之の全国規模での文字資料について考究した労作が刊行されている³⁷⁾。私印についての検討が活発に行われている。坂詰久純の用水開削者と銅印とを結ぶ分析を表し、高島英之は私印の概説を表す他、焼印について所有機能以外にも検討が必要なことを提起している³⁸⁾。

遺跡出土の文字資料に対して祭祀的側面を重視する高島英之の論考が目立つが、別の観点を持つ研究者との検討を期待したい。

終わりに 項目毎に分けて研究例を紹介したため、本来つながりのある内容、いくつもの項目にまたがる検討を寸断して記すことになってしまった。遺構だけを取っても官道と条里、居宅と集落、寺院と瓦窯のように多様である。これに遺物の検討を組み合わせればとても分類し

きれるものではない。この項で紹介した報告者の意を表しきれず、片手落ちの紹介になってしまったことをお詫びします。

註

- 1) 木津博明 1995 「シンポジウム3 群馬県下の官衙とその周辺」日本考古学協会茨城大会
- 2) 『東国の国府』2000 上田市立信濃国分寺資料館
「坂東の古代官衙と人々の交流」2002 埼玉考古学会
- 3) 井上慎也 2002 「植松地尻遺跡で発見された古代建物群と刻書土器」『群馬文化271』
- 4) 田中広明 2002 「古代地方官衙の初現と終焉」埼玉考古学会
- 5) 大江正行 1992 「史跡十三宝塚遺跡」財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 調査報告書134集
- 6) 松田 猛 1999 「上西原遺跡」群馬県教育委員会
- 7) 小宮俊久 1999 「新田町内遺跡I」など 新田町教育委員会
- 8) 木津博明 1998 「東国の国府 in Wayo」
- 9) 「古代のみちーたんけん！東山道駅路」2000 群馬県立歴史博物館
- 10) 「東山道」2002 栃木県立なす風土記の丘資料館
- 11) 松田 猛 2000 「群馬県地方史研究の動向」『信濃52巻6』
- 12) 第42回埋蔵文化財研究集会 1997 「古代寺院の出現とその背景」群馬県の資料は高井佳弘が分担
- 13) 木津博明 1998 「上野国分寺」「聖武天皇と国分寺」関東古瓦研究会 雄山閣
- 14) 桜岡正信・関口功一 2001 「古代寺院の付属施設に関する一考察」群馬考古学手帳11
桜岡正信・関口功一 2003 「上野国分寺「東院」について」群馬考古学手帳13
- 15) 前原 豊 2000 『山王庵寺V』前橋市教育委員会
- 16) 池田敏宏 「三原田諷訪上遺跡瓦塔の編年的位置付け」赤城村歴史資料館紀要 第4号
- 17) 松田 猛 1997 「上野国分寺文字瓦の再検討」ぐんま史料研究第9号
高井佳弘 2002 「一本作り軒丸瓦における布と模骨」財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 研究紀要20
滝沢 匠・小泉範明 2003 「同範軒平瓦の一例」東国史論。
栗原和彦 2003 「多野郡吉井町に太宰府の軒丸瓦があった」『群馬文化276』
- 18) 関口功一 2000 「古代集落遺跡の地域史的意義」岩田書院
- 19) 神谷佳明 2001 「縁釉陶器と古代上野国」財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団研究紀要19
- 20) 『小八木志賀戸遺跡』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 調査報告書
- 21) 外山政子 1998 「関東北西部の平安時代住居とカマド」『法政考古第24集』
- 22) 石守 晃 1995 「復元住居を用いた焼失実験の成果について」財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 研究紀要14
- 23) 大塚昌彦 1997 「竪穴式住居掘削考」『群馬考古学手帳7』
- 24) 坂口一 1999 「古墳時代水田における畦つくり過程の復元」財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団研究紀要16
斎藤英敏 2001 「小区画水田・極小区画水田の構造」財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団研究紀要19
- 25) 深澤敦仁 1999 「水田祭祀跡に関する覚書」『考古学に学ぶ—遺構と遺物—』同志社大学
「古墳時代水田から出土する遺物についての覚書」財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団研究紀要16
- 26) 能登 健・小島敦子 1997 「群馬県の水田・畠調査遺跡集成」財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団研究紀要14
- 27) 新井 仁 2001 「群馬県における平安時代の水田開発について」財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団研究紀要19
田中 雄 2002 「群馬県内条里制研究資料の収集と解題」財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団研究紀要20
- 28) 能登 健 2000 「関東地方の畠」『畠の考古学』日本考古学協会
小島敦子 2000 「洪水災害を受けた平安時代畠」『畠の考古学』前に同じ
- 29) 飯島義男 2002 「古代の灌溉用水遣構・牛堀の再検討」ぐんま史料研究第20号
- 30) 大塚昌彦・石井克己・井上唯雄 1996 「古代の牧と考古学調査」群馬文化245
- 31) 『発掘された地震痕跡』1996 埋蔵文化財研究会
- 32) 桜岡正信・神谷佳明 1998 「金属器模倣と金属器指向」財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団研究紀要15
桜岡正信 2003 「武藏型甕について」高崎市史研究17 など
- 33) 2003 『光仙房遺跡』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 調査報告書308集
- 34) 『須恵器窯構造資料集1』1999 窯跡研究会
- 35) 中沢 悟 1996 「紡錘車の基礎研究(1)」財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団研究紀要13
高島英之・宮瀬交二 「群馬県出土の刻書紡錘車についての基礎研究」群馬県立歴史博物館紀要第23号
小林大吾 「群馬県出土の発火具について」群馬考古学手帳13
- 36) 井上唯雄・松田 猛 1999 「群馬県出土の墨書・刻書土器集成(3)」群馬県教育委員会
- 37) 高島英之 2000 「古代出土文字資料の研究」東京堂出版
- 38) 坂詰久純 1998 「群馬県境町保泉・丸山遺跡出土の銅印」国立歴史民俗博物館研究報告79
高島英之 1998 「古代の私印について」前に同じ
高島英之 2001 「群馬県榛名町高浜広神遺跡出土の平安時代焼印について」青山考古第18号

6 中世・近世

飯森 康広・黒澤 照弘

中世

(1) 全国的な研究動向に即して

花の御所体制 地方の有力国人（武士）が館を造営する形態として、小島道裕が近年提唱しており、14世紀末に足利義満が作った花の御所を模倣して、地方の館を造営したことを見出します（小島 2002）。公的な表空間である主殿と公的な奥空間である会所、当主の日常生活の場である常の御殿などを備えた建物様式である。岐阜県神岡町の江馬氏館や長野県中野市の高梨氏館などの発掘調査成果を具体例とする。こうした屋敷形態の受容は室町将軍が行う儀礼的な侧面を生活様式として受容した結果である。この館空間の分析は、小野正敏による福井県の一乗谷朝倉氏館の分析（小野 1997）を発展的に継承した成果であるが、東国武士の館についても、早くから寝殿造りの系譜を引かない簡素な形態として対置されてきた。昨今、花の御所体制が幕府権力への憧憬に基づいた特異形態であることが再認識されることによって、むしろ在地レベルで発展してきた館形態の解明が重要性を増してきている。高崎市の矢島遺跡はそうした館の代表例と評価される。果たして東国の館形態はどのように存在するのか。系統立てた検討が当面の課題と考えられる。

掘立柱建物の研究 1998・1999年に奈良国立文化財研究所が行ったシンポジウム「掘立柱建物はいつまで残ったか」の成果が『埋もれた中近世の住まい』という報告であり、全国的な視野で中近世の掘立柱建物の構造変化や礎石建物への変換を扱った本格的な論集として、現在の到達点を知ることができる。こうした成果を受けてか、近年掘立柱建物跡に関する研究会が続いている。福島県考古学会中近世部会では「東北地方南部における中近世集落の諸問題 一掘立柱建物跡を中心として」と題した研究大会が2000年に開催され、調査成果の地域的な集約が図られた。2001年の東北中世考古学会第7回研究大会「掘立と竪穴 一中世遺構論の課題一」では、掘立柱建物調査における根本的な問題提起として、調査における方法論と報告方法が問われた。中でも佐々木浩一が「図面に書いたものが柱穴である限り、全部の柱穴を使い切る覚悟・気合が必要」と述べたことに代表されるとおり、掘立柱建物跡に対する遺構論が熱く語られている。近年のこうした動向は、調査事例の蓄積を踏まえ、研究成果を再点検し今後の課題を方向づける作業として、新たな研究段階に入ったことを意味している。

(2) 中世の様相を探る

城館・屋敷 城郭の整備発掘調査が増加しており、新知見が得られている。太田市の金山城では地盤の金山石（凝

灰岩）を使用した石垣があり、「頸止め石」技法が確認された。箕郷町の箕輪城では技法の異なる石垣が二時期存在し、古い段階のものは後北条氏に関係する鉢形城（埼玉県寄居町）の石垣に近似することが判明している。その他、平井金山城（藤岡市）や名胡桃城（月夜野町）などで織豊期以前の石垣の調査事例が増加している。織豊期城郭の発掘調査では、沼田城調査によって金箔瓦が発見され、豊臣政権の徳川包囲網の存在が想定されている。

屋敷調査では、前橋市の中内村前遺跡で12世紀まで遡る屋敷跡が発見された。遺構年代の比定にAMS法による放射性炭素年代測定が傍証となったことも注目される。建物からは17期の変遷が想定されており、屋敷構造を知る好資料となる。この他、高崎市南部から前橋市南部・伊勢崎市に至る北関東自動車道用地の調査では、百メートルを越えない規模を持つ大小様々な環濠屋敷が見つかっている。これらの違いは時期差や階層差も想定されるが、隣接する場合屋敷が集合する集落形態であると見なされるなど、今後の検討課題が多い。

集落 伊勢崎市の下植木壱町田遺跡では、一辺約37m規模の堀に囲まれた中世後期の屋敷遺構と堀外に広がる建物群が見つかった。飯森康広は全体を集落としてとらえるとともに、一町規模を指向する形態とそれを細分する意識を見いだした（飯森 2000）。

堅穴建物 堅穴建物は階層差や職制差を示す建物として注目されるが、富岡市の一ノ宮本宿・郷土遺跡IIは、堅穴住居（堅穴建物）24軒と掘立柱建物3棟で構成される集落遺跡である。こうした集落形態は想定されていたが、実際の事例がどのような要件を持つものか検討課題が多い。

建物 大江正行は県内の調査事例を集約、建物構造の時代変化を想定した。屋根構造の変化では15世紀前半以前に叉首組が多用され、15~16世紀までは垂木構造の切妻屋根、17世紀に至って民家建築で叉首組の小屋組が多用される。礎石使用は18世紀頃から徐々に使用されたとする（大江 1994）。

近年の調査成果で注目されるものとして、安中市の中宿在家遺跡・中宿在家II遺跡は出土遺物も少ないが、12世紀以降存続した屋敷遺構と考えられている。主要建物を含む大部分の建物が総柱建物である点で注目される。中世後期の調査事例では、吉井町の神保植松遺跡で、戦国期国人領主の本拠城郭における建築の到達点を見ることができる。曲屋的な形態に複数の居室を造りだしている。掘立柱構造から礎石構造への変化に関して、玉村町の上福島中町遺跡では天明3年（1783）に浅間山噴火によって被災した集落が調査され、主屋は全て礎石建物へと移行していることが確認された。今後とも同時期の建物調査事例は増加するものと言え、地域差などを含め礎石建物の分布状況が注目される。

墓制・信仰 高崎市の小八木志志貝戸遺跡では、総数85

基という大規模な中世墓地が調査され、坂井隆によって墓域の性別や年齢差による分布や構成、使用石材や副葬品の差異、火葬や土葬の比率など多岐にわたる検討がなされた（坂井 2001）。被葬者の階層差は乏しく、大部分が土葬であることなど地域的な傾向がとらえられた。今後は他地域との比較研究が期待される。

藤岡市の上栗須寺前遺跡では、銅製の香炉・花瓶と舶載陶磁碗・皿が一括埋納される土坑が発見された。坂井隆は密教法具と三具足が混在し、陶磁器が転用されていることなどに着目し、全国的な埋納遺跡の傾向のなかで位置付けを行った（坂井 1997）。希少な事例ではあるが、当時の宗教的な習俗を知る貴重な成果である。

大量出土銭に関して、古くから出土例はあるものの、本格的な研究は立ち後れていた観がある。近年、山下歳信による上大屋中組遺跡（大胡町）ほかの詳細報告により、ようやく本格的な研究成果が見られるようになった（山下 1999）。

遺物 安中市の清水遺跡II区では、15世紀後半に比定される土師質土器皿や内耳土鍋を生産した窯体3基が調査された。土師質土器皿の出土数は1000点を超える。大中小3種の規格が認められる。内耳鍋も口径約30cmを中心に大中小3種の規格が存在することが判明した。

土器の編年研究では、高崎市周辺資料を中心とする『新編高崎市史』の成果がある。星野守弘は内耳土鍋をI～V'期に、鉢をI～VI期に編年した。志田登は土師質土器皿をI～VII期に編年している（星野他 2001）。

前橋市の小島田八日市遺跡では15・16世紀の多量な土器に混じって、五輪塔部材・石鉢・穀臼・茶臼の未製品、五輪塔の石鉢転用加工途中品が出土した。遺構は不明瞭だが粗粒安山岩を主材料とする加工場の一部又は周辺と考えられている。近くには「あずま道」の推定ルートもあり、石材加工の拠点的な活動地と推定される。

交通と流通 中近世の幹線道とされる「あずま道」の調査例が増加している。前橋市の今井道下道上遺跡や高崎市の小八木志志貝戸遺跡などがある。坂井隆によれば、道幅は約2m前後で、原則両側側溝であるという（坂井 1999）。前橋市の小島田八日市遺跡では石造物加工との関連も窺える。「あずま道」に関しては文献史料が少なく、当面は考古資料からの解明が先行するだろう。

石造物石材の流通に関しては、笠懸町の天神山石材供給圏を追跡した国井洋子の業績（国井 1997）や、利根川流域の流通石材の分布と時代変化を網羅的に研究した秋池武の業績がある（秋池 1998）。谷藤保彦・山下歳信・水谷貴之は、県内出土の茶臼を集成し、形態的特徴や使用石材、用途などの分析を行なった（谷藤他 2003）。遺跡からの石造物出土例は多く集積しており、その統計的な解明が今後とも主流となっていくだろう。

（飯森康広）

近世

(1) 全国的な研究動向に即して

近世遺跡の代表例として挙げられる江戸遺跡では、開発に伴う発掘調査例の増加により、成果を基にした研究も深まりを見せている。しかし、近世遺跡の調査例は、城郭などの特殊な遺跡、大消費地である江戸、大生産地にある窯跡がその大半であり、発掘対象が限定されているのが現状である。都市生活や窯業についての調査、研究が深まりを見せている一方で、村落の遺跡調査例は少なく、資料集成も儘ならない状況にあると言える。

陶磁器は、近世遺物の中でも盛んに研究されている分野である。消費地調査例の増加に伴う、年代比定が可能な出土陶磁器も増え、より詳細な編年もなされている。九州近世陶磁学会では、2001・2002年に開催された「国内出土の肥前陶磁 一東日本の流通をさぐるー」・「同一西日本の流通をさぐるー」のシンポジウムの中で、過去に肥前陶磁器が出土した遺跡を網羅する試みがなされている（九州近世陶磁学会 2001・2002）。瀬戸市埋蔵文化財センターにおいても、瀬戸・美濃大窯製品の出土した遺跡を全国規模で扱い、中国陶磁器の模倣をも視点に入れたより大きな論議がなされている（瀬戸市埋文センター 2001）。各地域の様相を大枠としてまとめたこれらの成果は、陶磁器研究が一定の深まりを見せておりと言えよう。一方、漆器や木製品、金属製品などその他の近世遺物については、出土量も少なく資料集成の段階であり、研究の充実には至っていない。

(2) 県内の様相を探る

近世遺跡 県内においても近世遺跡調査例は少ない。前橋城や高崎城などの近世城郭における調査は見られるが、複合遺跡の中で近世遺構が調査される例が大半である。しかし、県内の近世遺跡には、他の都道府県には無い特筆すべき大きな特徴がある。それが、天明三年（1783）の浅間山噴火に伴う火山性堆積物に埋没した遺跡の発掘調査である。嬬恋村の旧鎌原村発掘調査を端緒に、渋川市中村遺跡では水田や畠跡が出土し、玉村町上福島中町遺跡・吾妻町上郷岡原遺跡では火山性堆積物に埋没した村落が確認され、当時の様相を知る大きな手掛りとなっている。特に上福島中町遺跡と上郷岡原遺跡は、村落の詳細な景観をも復元できるほど良好な状態で出土しており、特筆すべき遺跡と言えよう。上福島中町遺跡では、陶磁器の他にも豊富な種類の近世遺物が出土しており、実年代が明確で多様な近世遺物が出土したこと重要な成果と言える。これら、両遺跡の発掘成果は、今後の近世考古学研究に大きな影響を与えるものと期待される。

火山性堆積物により埋没した耕地や村落の、復旧状況を知ることができる遺跡調査例も増えてきている。谷藤保彦は、降下火山灰と泥流により被災した高崎市上滝地区がどのように復旧したか、文献も活用し紹介している。

高崎市上滝根町北遺跡などの調査例で確認された耕作痕や土坑には、耕地復旧工事としての痕跡や灰焼き穴と思われる土坑があるとの指摘もしている（谷藤 2002）。

関俊明と諸田康成は、長野原町久々戸遺跡の発掘成果を活用し、同地域に浅間A軽石が降下した日時を考古学的に検証しようと試みている（関・諸田 1999）。

発掘成果を文献と比較しクロスチェックする同様な手法は、赤堀町五目牛南組遺跡でも取られており成果を挙げている。五目牛南組遺跡では、近世から近代頃の屋敷跡が3区画確認されている。江戸期の村絵図や文献、町内に残る墓地などを調べた成果を活用し、屋敷跡の住人を特定することのできた稀少な調査例である（坂井 1992）。

陶磁器 群馬県内においても、概して小規模ではあるが窯業が営まれていた。大泉町では「小泉焼」が農家の副業として営まれていた。焙烙やカワラケなどが生産されていたが、寛文年間（1661～1673）頃になると十能も生産されるようになった。この十能の製造法に、棧瓦の製造法を取り入れたのが「小泉瓦（十能瓦）」であると言われている。安くて軽い小泉瓦は、人気もあり需要も多かつたが、軟弱であるため販路は狭かったようである（大泉町誌編集委員会 1983）。小泉焼については、太田市東長岡戸井口遺跡など出土例は散見できるが（岩崎・木津 1999）、文献も少なく実態は不明瞭な部分が多い。大脇潔は、小泉瓦が全国的に見ても非常に珍しい形状をしており、それまでの瓦製作の流れとは異なり忽然と現れる特異なものであると指摘している。小泉瓦の普及時期についても、関東の棧瓦の普及時期を考慮し、幕末から明治頃ではないかとの考察も加えている（大脇 2001）。

富士見村には「皆沢焼」が営まれ、磁器焼成も行われていた。僅かではあるが、月夜野町後田遺跡などで出土例が確認されている（大江 1988）。皆沢焼については、古くは村誌の中で尾崎喜左雄により概要の紹介がなされている（尾崎 1954）。1950年代頃は、大生産地でさえより古い窯跡や窯業の姿を追い求めていた時代である。この頃に、幕末期の窯業を紹介することは極めて珍しく、現在の研究動向を考えれば先見の明がある。仲野泰裕は、採集した陶器や磁器、窯道具などを掲載し、皆沢焼における瀬戸・美濃からの影響を、類例を挙げて紹介している（仲野 1984）。大西雅広は、出土陶磁器から操業時期を検討するなど、より考古学的視点から皆沢焼を検証している（大西 1998a）。

皆沢焼が焼かれた場所は前橋藩領内であることから、前橋城本丸脇、群馬県庁北側付近で営まれていた「高浜焼」（前橋市）と深い関連があると指摘されている。加部二生は、文献を参考に高浜焼の概要を紹介し、採集資料を掲載している（加部 1989）。

砥石 南牧村砥沢では、江戸の開発を背景に多くの砥石

が生産された。江戸時代を通じ御用砥として幕府の保護を受けていた「砥沢砥」が、県内のみならず県外にも流通していたことは、文献から知られていた（南牧村誌編さん委員会 1981）。長野県松本市松本城下町跡本町第4次調査では、36・38号土坑内より合計4,859点もの多量の砥石が未使用の状態で出土しており、文献と同様に発掘調査からも、県内外に多量の砥沢砥が流通していたことが伺える（竹内 1998）。

内田祐治は、東京都清瀬市下宿内山遺跡より出土した534点の砥石を、共伴した陶磁器により時期区分をしている。砥沢砥の特徴であると文献に記されていた「莫産目」が、18世紀頃の砥石に見られる「櫛歯タガネ痕」ではないかと考察するなど、製作工程時の痕跡で時期が比定できる可能性を指摘している（内田 1990）。

火打金 「吉井火打金」は江戸遺跡でも出土例があり、広範囲に流通していたことが知られている。小林克は、東京都文京区真砂遺跡出土の火打石とともに、吉井火打金についても触れており、茨城県山方町産の火打石と吉井町で製作された火打金が、火打道具一式として「吉井」の商標で売られていたことを紹介している。「吉井本家」の登録商標のもと、東京（もしくは江戸か）でも火打金が生産されていたことも指摘している（小林 1994）。

大西雅広は、文献を参考に吉井火打金の概要を紹介し（大西 1997）、「あかりの資料館」所蔵の資料を中心に考古学的な視点で考察を加え、吉井町と東京（もしくは江戸か）で生産された吉井火打金の差異を判断することは難しいことを指摘している。出土火打金から普及時期は18世紀末から19世紀前半頃との考察も加えている（大西 2000）。また、小林大悟は、古代から近世にかけての県内出土火具の集成を試みている（小林 2003）。

銭貨 大西雅広は、天明三年の浅間山噴火に伴う火山性堆積物下より出土した中村遺跡の出土銭を分類し、天明三年当時の銭貨構成を明らかにしている。旧鎌原村出土銭では、寛永通寶真鑄製四文銭96枚を一縉とした完全な「縉」を紹介し、文献のみ知られていた事実を考古学の面からも明らかにしている。また、この縉の中には鉄銭が含まれていることも指摘している。

寛永通寶以外の銭貨に「寶永通寶」がある。寶永通寶は、宝永5年（1708）閏正月に通用令が出され、翌6年正月には通用停止となった極めて短命な銭貨である。通用停止後に引き替えが行われたが、停止後もかなりの数が回収されずに残っていたようで、旧鎌原村より出土した縉の中から確認された鉄銭も、こうした資料のうちのひとつと指摘している（大西 1998）。（黒澤照弘）

参考文献

- 相京建史・斎藤英敏 2002 『上滝根町北遺跡』
財團法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 秋池 武 1998 「利根川流域中世石造物石材の流通と変遷」『群馬県立歴史博物館紀要』第19号
- 秋本太郎 2002 『史跡箕輪城跡III』箕郷町教育委員会
- 浅川滋男他 2001 「埋もれた中世の住まい」
- 飯森康広 2000 「伊勢崎市下植木町田遺跡にみる中世集落」『群馬文化』第264号
- 石守 晃 2002 『中内村前遺跡』
財團法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 岩崎泰一・木津博明 1999 『東長岡戸井口遺跡』
財團法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 内田祐治 1990 「下宿内山遺跡出土の砥石」『清瀬市郷土博物館紀要』大泉町誌編集委員会 1983 『大泉町誌』
- 大江正行 1988 「後田遺跡」II 財團法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 大江正行 1994 「中世上野における建築遺構の傾向 一発掘調査された建築遺構を中心にー」『群馬における地域性の変遷』群馬県地域文化研究協議会編
- 大脇 潔 2001 「十能瓦考 一瓦の伝播と自生ー」『古代』第109号
- 尾崎喜左雄 1954 『皆澤の瀬戸場』『富士見村誌』
- 大西雅広 1997 「上州吉井の火打金と火打石」『考古学ジャーナル』No.417
- 大西雅広 1998 a 「「皆澤焼物場所」出土の資料について」『群馬の考古学』
- 大西雅広 1998 b 「天明の浅間焼に埋もれた近世銭貨」『近世の出土銭II一分類図版篇ー』
- 大西雅広 2000 「民具資料からみた吉井火打ち金 一あかりの資料館 所蔵資料を中心としてー」『群馬考古学手帳』10
- 小野和之 2003 『上福島中町遺跡』
財團法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 小野正敏 1997 『戦国城下町の考古学 一乗谷からのメッセージ』
- 加部二生 1989 「前橋高浜窯について 一化政期における殖産興業政策の失敗ー」『群馬文化』217
- 九州近世陶磁器学会 2001 『国内出土の肥前陶磁 一東日本の流通をさぐるー』
- 九州近世陶磁器学会 2002 『国内出土の肥前陶磁 一西日本の流通をさぐるー』
- 国井洋子 1997 「中世東国における造塔・造仏用石材の産地とその供給圈ー上野国新田荘の天神山凝灰岩を中心にー」『歴史学研究』第702号
- 小島道裕 2002 「京都から江戸へ」「天下統一と城」
- 小林 克 1994 「江戸遺跡から出土する火打石の生産地等について」『江戸遺跡研究会第七回・発表要旨 江戸時代の生産遺跡』
- 小林大悟 2003 「群馬県出土の発火具について」『群馬考古学手帳』13
- 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 2002 『年報』21
- 財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター 2001 『戦国・繩文期の陶磁器流通と瀬戸・美濃大窯製品 一東アジア的視野からー』
- 坂井 隆 1992 『五目牛南組遺跡 一歴史時代編ー』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 坂井 隆 1997 「群馬県上栗須寺前遺跡の埋納遺物について」『貿易陶磁研究』No.17
- 坂井 隆 1999 「あづま道、上野のポスト東山道」『発掘された中世古道パート 2』中世みち研究会
- 坂井 隆他 2001 『小八木志志貝戸遺跡群 3』
財團法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 杉山秀宏 1994 『小島田八日市遺跡』
財團法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 関 俊明・諸田康成 1999 「天明三年浅間災害に関する地域史的研究ー北東地域に降下した浅間A軽石の降下日時の考古学的検証ー」『研究紀要』16 財團法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 千田茂雄他 2000 『清水遺跡II区』『安中市史』第4巻
- 東北中世考古学会編 2001 『掘立と竪穴 一中世遺構論の課題ー』
- 竹内靖長 1998 『松本城下町跡 本町3・4次 伊勢町14~17次試掘調査報告書』松本市教育委員会
- 谷藤保彦他 1997 『神保植松遺跡』
財團法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 谷藤保彦 2002 「天明三年浅間山噴火後の耕地復旧について 一高崎市上滝町周辺の遺跡調査からー」『研究紀要』20 財團法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 谷藤保彦・山下歳信・水谷貴之 2003 「群馬県内出土の茶臼について」『研究紀要』21 財團法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 友廣哲也 1997 『中宿在家遺跡・上豊岡一里塚遺跡』
財團法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 仲野泰裕 1984 「群馬県勢多郡富士見村皆沢焼について」『愛知県陶磁資料館研究紀要』3
- 楨崎修一郎他 2003 「遺跡は今【上郷岡原遺跡の調査】」
財團法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 南牧村誌編さん委員会 1981 『南牧村誌』
- 福島県考古学会中近世部会 2000 平成12年度研究セミナー資料 『東北地方南部における中世集落の諸問題』
- 星野守弘他 1996 『新編高崎市史』資料編3 高崎市史編さん委員会
- 松島榮治 1994 『埋没村落鎌原村発掘調査概報 一よみがえる延命寺ー』嫌恋村教育委員会
- 宮田 純他 2001 『史跡金山城跡環境整備報告書発掘調査編』太田市教育委員会
- 山下歳信他 1999 『上大屋中組遺跡・上大屋下組遺跡・上大屋天王山遺跡』大胡町教育委員会
- 横沢克明他 1986 『中村遺跡』渋川市教育委員会